
他愛ない日常

M

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他愛ない日常

【Nコード】

N5564B

【作者名】

M

【あらすじ】

これは、あんな人やこんな人達の、ごく何気ない、「他愛ない日常」の1コマ…なのか！？含有成分…ギャグ：60～80パーセント、その他：20～40パーセント（推定）。十数話程の連載予定。原則1話完結ですが、例外も有り。第1、2話は短編を修正した上で再録しています。

1 コマ目：甘くないチョコレート（前書き）

短編として投稿した時より、若干手直ししています。

1 コマ目：甘くないチョコレート

その日は「2月14日」だった。

ただし、この男はそれがどうしたといわんばかりに、今日も競馬場に行っていた。

「依頼人も来ないし、町へ繰り出すか！」

とはその男…小五郎の弁であるが、コナンも蘭も学校へ行っているというのに留守にしているのは、来る依頼も来なくなるに決まっている。

まずポアロで一服、パチンコ店と雀荘を梯子して、さらに新聞片手にメインレース。

そして、今帰ってきた。

「くそーっ！最近『カミナリボーイ』は調子いいからそろそろ賭けてやるかと思ったのにーっ！！」

カミナリボーイの今日の騎手は、いつもの人ではなかったらしい。

「はあ、『谷豊』は休みだったのか…」

健闘したものの2着に終わった。

ぶつぶつと不満を言いながら、小五郎は事務所のドアに手をかけた。

開けようとする、何かがドアにぶつかった。

足元を見ると、ラッピングされた小さな箱。

「…何だこりゃ？」

かがんで箱を持ち上げる。

「…ああ、今日はバレンタインだったっけ？」

今頃思い出す男。

「…という事は、チョコだよね？…誰からだ？蘭はまだ学校だし…」
鍵を開けて中に入りながらぶつぶつと呟く。

「ま、まさか…」

いきなり顔が緩んだ。

「もしかして、オレのファンの女の子！？」

鼻の下も伸びっぱなし。

「ああ、もしかしてもしかすると、愛しのヨーコちゅわん！？」

小躍りまでし始めた。

「ああ、きつとこのチョコを握り締めて、ドアの前で待っていたんだろっな・・・温かく迎えてやれなくてごめんよヨーコちゃん！」
…誰もそんな事言っていないのに。

うきうきとラップリングを開けると、手紙も入っていた。

「おお！？これは愛のメッセージい！？『大好きな小五郎さんへ』なんて書いてあったりしてー」

手紙を抜き取り、表に書いてある文字をまじまじと見つめる。

わりとカチツとした、見覚えのある文字で一言。

『
あなたへ
』

「…なああああつ！！？」

爆弾でも見つけたかのように、小五郎はチョコを机の上において部屋の端まで後ずさりした。

「え、英理い！？」

明らかにおびえている。

（…いかん、落ち着け…）

「…なんだよ！ 期待しちまったじゃねーか！」

一人で勝手に毒づき、いくらか気を鎮めた後、もう一度チョコと手紙を手を取った。
手紙を開ける。

『あなたへ

留守だったから置いておいたわ

どうせパチンコにでも出かけたんでしょ？』

「ちくしょー！ 当たってやがる！」

そう言いながらチョコの入った箱を開けにかかり、手紙も同時に読み進める。

『バレンタインだから、チョコをあげるわ

ありがたく受け取りなさいよ！』

「…余計なお世話だったの」

『そうそう、そのチョコはね、ジゴバのチョコレート…』

「おっ！ いいじゃねーか」

頬を緩ませながら箱のふたを開ける。

『…を使って、私が手作りしたの』

「…くわーーーーっ！！！」

訳のわからない叫び声をあげて手紙を投げる。

「なんでそんな余計な事をするんだよ！？ 既製品をくれ、既製品を！！」

ぜえぜえと荒い息をしながら手紙を拾い上げる。

…結局読むのか。

『まあ、とにかく食べてみて頂戴』

そこまで読んだところで、小五郎はチョコに目をやった。

「…さてよ、手作りチョコって言っても、いったん溶かしたチョコを、また固めるだけなんだよな？」

形はわりと綺麗だ。

「…それなら英理でも、そこそこのモンが作れるかもな…材料はジゴバだし」

そう呟いて小さいチョコを一粒手に取り、口の中に入れた。

―今まで食べた事のない味だ。

―甘くない。

―かといって苦くもない。

―これは…

（しょっぱ〜〜〜〜〜い！！！！）

小五郎は口を押さえて、必死に苦しみに耐えていた。
声が出ない。

口の中のチョコが溶けていくたびに広がる…塩の味。

『チラシに、「塩を隠し味にしたチョコ」っていうのが載ってたから試してみたのよ』

（隠し味だ！？ 隠れてねえ！！）

小五郎は涙目になりながら、その一文を読んでいた。

先に読んでおけばよかったと後悔しても、時既に遅し。

（み、水！）

冷蔵庫を開ける。こういうときに限ってミネラルウォーターがない。（ああ、こうなったら水道水だ！ このチョコよりはずっとマシだろ！）

台所の流し台で口をゆすぎ、何とか一命は取り留めた。

息を切らしながら、手紙を置いたテーブルに戻る。

『どう？ 飛び上がるほど美味しくて、ビックリしたでしょ？』

「バー口おお！！ 飛び上がるほどまずくて死ぬかと思ったぞ！！」
一人部屋の中で手紙に向かって怒鳴る男…
この状況では仕方ないのかもしれない。

『味見はしてないけどね』

「だーっ！！ なんでいつもそうなんだ！？ 自分で味見しろ、味見を！！」

『カカオポリフェノールって、わりと体にいいらしいわよ』

「このチョコは体に悪い！！ 絶対悪い！！ 塩分取りすぎちまうだろ！！ 高血圧になっちまうだろー！！」

『メタボリックシンドロームって言葉知ってる？』

「こつちが聞きてーよ！！ お前がメタボリックシンドロームの原因になるだろーが！」

『蘭もいるんだから、体には気をつけることね』

「こんなの作ったお前が言っな！！ 高血圧になったら、恨むぞー！！」

『まあ、これからしばらくは帰らないからね 英理』

「帰ってくるなー！！」

肩で息をしながら、残りのチョコをどうしようかと考えていた時、手紙の裏にも文字が書いてあるのに気がついた。

『P・S・気持ちは込めたんだからね？』

「……」

しばらく怪訝な顔をしていた小五郎は思わずふっと笑った。

「バーロオ…まずいチョコ送りつけて散々変な事書いておいて何だよ…どういつ『気持ち』だって言っただ…？」

憎まれ口をたたきながらも、顔は嬉しそうだった。

「はつきり書けよな、そういつことは……」

しばらくそんな気分に使っていた時だった。

「おじさん、ただいま！」

その時コナンは、小五郎が、

（よくぞ帰ってきた！）

と小さくガッツポーズをしていたのに気がつかなかった。

「お！ 帰ったか、コナン！」

「おじさん、それ何？」

指差したのはチョココの入った箱。

「チョコレートだ！ 食うか？」

「うん！」

と言って手を伸ばしかけたその時、

『あなたへ』

という見たことのある字が目に残った…

「や、やっぱりやめとく!」

「な、なんでだよ?」

「それ…英理おばさんから…でしょ?」

小五郎は見た。□元を引きつらせながらコナンが一步後退したのを。
(ちっ、ばれたか…)

「おじさん宛ての、心のこもったチョコレートだからさ…ボクが貰うわけにはいかないよ!」

「てめえ、上手い事言って、食べたくないんだろ!? おすそ分けだ、食え!!」

「やだー!!」

「うるせえ、道連れだー!!」

蘭が帰ってくるまで、事務所内の壮絶な鬼ごっこは続いていたという…

その頃、妃法律相談所。

「ただいま、栗山さん!」

「ああ、先生!」

「ニヤー」

「ゴロちゃんも、ただいま〜」

英理はお気に入りのロシアンブルーを抱き上げた。

「ずいぶんご機嫌ですけど、どちらに行かれてたんですか?」

緑の問いかけに、英理は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ナ・イ・シヨ」

「…」

「さあ、仕事仕事」

いつにない表情を見た緑はきょとんとしていたが、やがてニヤツと笑った。

（ダンナの所だなあ？）

「先生、もうすぐ復縁ですかあ？」

「ん？何か言った？」

「なんでもありません」

英理が、いつもと違うキャットフードを皿にあげた。

「ほーら、バレンタインデーだから、ゴロちゃんにも特別なご馳走よ」

（「も」ってことは、ダンナにも…？）

緑は身を乗り出した。

「まったく、あの人ったら、折角行つたのに、留守だなんて、ねえ？」

ぶつぶつとゴロに向かって独り言を言っている。

（…なんだ、会ってないのか…）

ちよつとがっかりして体を椅子の背もたれに預けなおし、キーボードを叩く。

「…でもいいのよ、ちゃんと置いてきたから…」手作りチョコレイト」

「じぶう！？」

緑が思いつきりミスタッチをした。

『ガチャー！』という音と共に、理路整然とした文書に割り込む『#%*¥』という文字列。

「あら、どうかした、栗山さん？」

「い、いえ…」

ため息をつき、文章を訂正にかかった。

(…「手作り」か…そりゃ、かわいそうに…復縁はまだ先なのかな…)

キャットフードを食べていたゴロが顔を上げて「ニャ？」と鳴いた。

「ごめんねー、本当はゴロちゃんにもチョコをあげたいところだけど」

英理がその頭を優しくなでる。

「チョコって、犬や猫には毒なのよね」

「…ウニャー」

ゴロがその言葉を聞いてがっかりしたのか、ほっとしたのかは誰にも分からない。

1 コマ目：甘くないチョコレート（後書き）

作者より　どうも、短編集の連載化を決行しました、Mであります！
！こついう、気楽な小説を書いてみたかったので、いくつかネタを考えてみました。

この1話目は、短編として投稿済みですが、前書きにも書いたように、若干手直ししてあります。

ちなみに私、今年もチョコをあげる相手はいませんでした・・・（TT）

「甘くないチョコレート」・・・というか、しょっぱいチョコレート（・・・）現実も「甘くない」みたいな、そんなノリです（^^；）

さて、「この小説は、どんなカテゴリーに入るんだろう？」と、ふと自分で考えてみました。

ギャグ・・・と呼ぶほど笑えるものでもないし、若干恋愛やシリアスも入っている感じもするけど・・・

・・・分かった！「おちゃらけ」だ！（おい）・・・こんな雰囲気の小説ですが、どうぞお付き合いください・・・m（――）m

2. 目次・目録・索引（前書き）

これも、1 話目同様に手直ししています。

2 コマ目：こりないやつら

「えーと、今日の夜勤は、千葉君だな！」

目暮警部が名簿のようなものを見ながらそう告げた。

「お先〜」

「どんまーい」

などと千葉刑事に声をかけながら、他の刑事たちはそろそろと一課を後にする。

「じゃあね、千葉君」

「頑張れよー」

佐藤刑事と高木刑事も例外ではなかった。

「やつぱ、仲がいいよなあ、お似合いだよなあ……」

2人並んで帰っていく所を見ながら、千葉刑事はそう呟いた。

「けど、いつになったらゴールインするんだか」

こつちまで神経使うよな、とため息をつく。

そのため息が、だだっ広い捜査一課の部屋に反響した。

誰も居ない部屋、机に向かう太っちょが一人……

絵に……ならない。

「……お腹空いたな……」

引き出しを開け、中に入っているお菓子に手が伸びる。

ちなみに千葉の机の引き出しは、まるでドラ。もんのタイムマシンを通り越して、異次元かのようなお菓子パラダイスだ。日替わりでお菓子が常駐している。

「はっ！？ 何やってんだオレ！？ ダイエットしようと決めてた

のに！」

後ろ髪を引かれながらも、引き出しを閉め、コンビニで買った肉まんと決別する。

「…仕事が終わってから食べよ」

もう一度ため息をついた。

「あーあ、早く調書まとめなきゃ…うーん…」

背中をそらして、大きく伸びをする。

「うおおっ!？」

…椅子から落ちた。

しばらく後、一緒に帰っていた2人は公園のベンチに腰を下ろした。

自動販売機から佐藤刑事が缶コーヒーを買ってきた。

「はい、今日もお疲れさま」

「あ、どうも…」

高木刑事は会釈してそれを受け取った。

「…ねえ高木君、確か今度非番だったわよね？」

佐藤刑事がそう言いながらプルタブを引いた。

「そうですね…」

高木刑事も同じようにする。

「デートしよつか、久しぶりに」

「えっ!？」

動揺のあまり、缶を取り落としそうになる。

「きゅ、急な話ですね…」

「…何よ、悪い？」

佐藤刑事が拗ねているのを見て、必死に首を振った。

「い、いえ、喜んで一緒にします…けど」

「けど、何よ？」

「あのー、また皆に『取り調べ』されるんじゃないかと…」

「ああ、そんな事もあったわよね」

佐藤刑事は苦笑いしながらふと天を仰いだ。

トロピカルマリニランドのときのことを思い出す。

少年探偵団に絡まれ、事件には巻き込まれ…

高木刑事の偽装工作もむなしく、なぜか一課の刑事達が大集合していたのだ。

まあ、おかげでスピード解決はしたのだが…

今考えれば、きっと、ずっと見張られていたに違いない。

「どうします？また偽装工作考えますか？」

「…なんか刑事の私たちが『偽装工作』なんて言ってるのもおかしいわね」

「そ、そうですね、あはは…」

「どこか、誰にも邪魔されないような穴場がないかしら？」

「そうですねー…」

と呟いた後、高木刑事はあることに気がついた。

夜の公園。

ざっと見てみたところ、静かだし、人もいない。

いつそ今すぐ、これからデート、という事にするのも悪くないので

は…

どこかへ食事に出かけるのもいいかもしれない。

―迷うな、高木渉！

そう自分に言い聞かせ、意を決して佐藤刑事の方に向き直る。

「さ、佐藤さ…！」

「
♪♪
」

佐藤刑事の携帯が鳴った。

「
……」

気まずい。

ちなみに、着メロは「太陽にほえろ」。

佐藤刑事は、携帯と高木刑事の顔を交互に見ながら言った。

「…何？言いたいことがあるなら聞いとくけど…」

「あ、いえ、電話の後でいいです…どうぞ、出てください…」

高木刑事は、ため息をつきながらコーヒーに口をつけた。

佐藤刑事がボタンを押した。

「もしもし？」

『ちよーつとお、聞いてよ美和子お！！！！』

「ぶはっ…ゲホ、ゴホ…」

耳をつんざく大音量。高木刑事にも聞こえるくらいだ。

驚いた高木刑事はむせてしまった。

佐藤刑事は思わず携帯を耳から遠ざけていた。

（…由美さんか…）

高木刑事は、息を整え、再び、慎重にコーヒーを飲んだ。

「何？ 落ち着いて話さないよ！」

『あのね？ これから合コンやる予定だったんだけどお…』

携帯に耳を近づけるには、まだ大きすぎる声だった。

「…またあ？」

一口コーヒーを飲み込んでから、呆れた声を出す。

『ついさっきになってドタキャンしてきた人がいるのよーっ！！』

ハウリングでも起こしそうなほどの絶叫がこだました。

「…頭数そろえたいから、私に出ろって言うんでしょ？」

『さっすが美和子、話が分かるじゃない!』

「だれも行くなんて言っていないけど?」

『えーっ、そんなかたい事言わないでよ! 食事代は向こうのおしりだし...』

「えっ!?! 何ですって、『焼肉バイキング』!?!」

佐藤刑事の目が瞬時に輝いた。

「さ、佐藤さん...」

目を点にして呆然とする高木刑事...

「あ...オホン、とにかく、私は行かないから!」

顔を赤らめて咳払いをした。

『...あー、そっか、高木君の手前、行くなんて言えないわよね?』

「ま、まあそうだけど...って、何で知ってるのよ、高木君と一緒にだつて!?!」

今度は佐藤刑事が叫んだ。

高木刑事も身を乗り出す。

『見かけたのよ、あんた達が2人で一緒に帰ってるところ...』

「あ、そ...」

ついていけないといった感じで、佐藤刑事はため息をついた。

隣の高木刑事も同じく、がつくりと肩を落とし脱力していた。

「あ、そうだ由美、どこか、いい穴場とか知らない?」

『え? 何? 今度の非番に2人でデートするのオ?』

「そ、そんな事はいいいから...!」

「あ、由美さん、他の人には絶対に言わないでくださいよ?」

高木刑事が会話に割り込んだ。

「と、とにかく、知ってるの、知らないの?」

『うーんと、そーねえ...』

「も、もったいぶらないで下さいよ...」

『ちよつと待つてよ、今『作戦』の名前を考えてるんだから』

「考えなくていいのよ、そんな事は!!」

『そうだ!!』『2人だけの穴場デート大作戦』でどう?』

「…そのまんまですね…」

「…『大』なんて付けるほどのモンじゃないでしょ?

それに、私達が知りたいのは、どこかにいい穴場があるかないかなんだから!」

『もお美和子ったら、急かさないでよ、今思い出すから…』

「―!?!」

その時突然、佐藤刑事の「刑事の勘」が働いた。
少し声を落として喋り始める。

「まずいわね…私たち、囲まれてる」

「えっ!?! な、何ですか佐藤さん!?!」

「しっ、振り向かないで高木君、動揺してるところを見せたらダメ…」

『え、美和子、囲まれてるって、チンピラにとか?』

携帯からも、由美の慌てた声が聞こえる。

「…もつと質が悪いかもしれないわね」

自嘲的な笑みを浮かべそう呟く。

『ちよつとやばいじゃない! 高木君、美和子を全力で守るのよ!』

「は、はあ…」

そんな会話が交わされている間にも、佐藤刑事は公園の隅々まで、神経を尖らせていた。

(…人数、かなり多いわね…)

『こちら南側の入り口の田宮！ 今のところ近辺に人通りはありません』

「了解、通行人が現れたら、できるだけ公園内を通るよう仕向けてください」

『おい、友川！！ 暇だからって絵描いてるんじゃない！！』

『あつ！ す、すいません高野さん！』

友川と呼ばれた人物は、慌ててスケッチブックを畳み、鉛筆を無線に持ち替えた。

そして、高野と呼ばれた50がらみの強面の男は、片手に無線、もう片方に双眼鏡を持っていた。

『こちら、滑り台下の高野だ！ 只今佐藤、高木両名は会話を中断し、佐藤が携帯電話で通話中！』

「相手は誰だか分かりますか？」

『こちら、ベンチ裏の福井です！ 相手は交通課の宮本由美のもよう』

「フツ…偶然とはいえ、由美さん、グッジョブです」

その場の『司令塔』とおぼしき男は、静かな口調で、不敵な笑みを

浮かべた。

『会話の内容は?』

『最初、宮本が合コンに誘っていたようですが、佐藤は断ったようです』

「それで?」

『えー、こちら同じく川中! 対象の口から『穴場』という単語が出ました』

「なるほど? 読めてきました… 2人は非番の日にデートを計画しているに違いありませんね」

『残念ながら、そこから先の会話は聞こえません…』

「分かりました…」

その男は一呼吸開けて、次の指令を出した。

「こちら、外灯下の白鳥! 全員引き続き両名の監視を続け、高木が不審な行動に出た場合は直ちに確保してください!!!」

『『了解!-!』』

…ああ、『こりないやつら』。

「……！！」

佐藤刑事は、もう我慢ならないという風に、声にならない声を上げ、すっとベンチから立ち上がった。

「さ、佐藤さん？」

『どうしたの美和子お……』

その問いに答える事なく、2、3歩進み、深呼吸をする。

そして、最後に大きく息を吸い込んだ。

「聞こえてるわよおおおっ……！！……！！……！！」

「ひひひひひひっ!!?」

…弾かれたように、公園中の一課の刑事達が飛び上がった。

2コマ目：こりないやつら（後書き）

作者より 2話目でーす。投稿済みの短編に、色々付け加えました。本庁の刑事さんとか、（勝手に決めた）佐藤刑事の着メロとか（＾ｖ＾）いや、作曲が大野さんなので・・・（知る人ぞ知る）

夜の風景なんで、背景を薄暗くしてみました。（携帯には反映されないみたいです）雰囲気は出たでしょうか？

次回からは、いよいよ未発表の短編を追加していきたいと思います！どれくらい先かは分かりませんが（おい）
もう一つの連載ともども、お付き合いくだされば幸いです（＾ｖ＾）
それでは。

3 コマ目：勿体ない夢

気がつけば蘭は、夜道を一人でとぼとぼと歩いていた。

（・・・わたし、なんでこうして歩いてるんだっけ・・・）

自分の手には2丁目の米花スーパ―の袋が握られていた。

（あ、そっか、買出しの帰りか・・・）

そんな事をぼんやりと認識した。

ちょうど、住宅地に差し掛かった時・・・

街灯も無いのに、急に暗かった足下が照らされた。

「えっ？」

俯いていた顔をあげると、横の家の明かりが煌々と付いていた。

確かに、今の今まで明かりなどついていなかった家。

浮かび上がったその家のシルエットには、見覚えがありすぎた。

「・・・」

蘭は周りの様子を確認した。

向かって右隣には、変わった形の阿笠邸・・・

・・・そして、今、蘭が前に立っているのは、古びた洋館。

今、明かりがついたということは・・・

「まさか・・・ね」
歩み寄って、そつと鉄柵の門戸を押す。

「！」

さび付いた音がしたが、何の抵抗も無く開いた。

「うそ・・・」

緊張と期待のせいか、急に、体が火照った気がした。
たぶん脈も速くなっているのかもしれない。

いてもたってもいられず、一直線に玄関のドアへと走った。

ドアの鍵も開いていた。

一気に漏れ出した部屋の明かりがまぶしかった。

「・・・」

息を吞んで、一歩ずつ家の中に入っていった。

「・・・あ!？」

蘭は目を見開いた。

広い玄関ホールの隅に、人影。

―それも、見覚えのある・・・

「・・・新一・・・？」

その人影は、呼びかけに応えるように、にっこりと微笑んで、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一歩近づいてくるたびに、ますますはつきりしてきた。

―やっぱり、新一だ。

―本当に・・・本当の・・・！

「新一！」

待ちきれずに、こちらから駆け出した。

お互い、１メートル足らずまで近づいたところで足を止めた。
蘭は、改めて目の前にいる新一を、上から下までまじまじと見つめた。

「・・・新一だよな？」

「バーロオ、他に誰がいるってんだ」

笑みを浮かべたまま、初めて口を開いた。

「・・・そうだね」

電話越しでない声を聞いて、蘭は安堵した様子で微笑んだ。

「・・・でも、どうして？どうしてここに・・・」

顔を見上げて尋ねると、新一は先ほどと同じような穏やかな顔をした。

「・・・言つたろ？帰ってくるって」

「・・・新一・・・」

不意に、新一がポケットに突っ込んでいた両手を出した。

肩に手を置かれたかと思うと、次の瞬間、引き寄せられた。

「きゃっ!？」

抵抗する暇もないまま、新一の胸元に飛び込むような形になった。

「し、新一・・・？」

呼びかけたが返事はなく、ただじっと、腕を蘭の背中に回している

だけだった。

―その代わり・・・

―後ろから誰かに呼びかけられた。

「蘭？らぁーん！」

「・・・えっ？」

顔を上げると、目の前には、机に置かれた「自習プリント」という名の紙。

「・・・あれ？」

振り返ると、後ろの席から、園子がシャーペンで蘭の背中をつついていた。

「そ、園子・・・」

「あ、やっと起きた！珍しいわね、あんたが授業中に寝るなんて。ま、今は自習だけど・・・疲れたの？」

「あ・・・うん、多分ね・・・って、ちよつと？」

苦笑いをして周りの状況を確認すると、おそらく自分が居眠りするよりずっと珍しいであろう光景がそこにあった。

「・・・な、何で皆こんなに集まってるの？」

蘭の席の周りを、2年B組の生徒が取り囲んでいた。

その数、ざっと見てクラス全員の90パーセント以上。

「うつふつふ、心当たりがないとは言わせないわよ、蘭！」

園子を含め、生徒たちはニヤニヤ笑っている。

「な、何！？」

その問いにはサッカー部の中道が答えた。

「鈴木がちゃんと聞いてたんだぜー、お前の寝言！」

「そう、この耳で、『新一、新一』ってね！」

園子が勝ち誇ったような顔をした。

「え、えーっ！？わたし、そんな事言ってたのっ！？」

蘭は顔を赤らめて、慌てに慌てた。

「ねー蘭、工藤君が夢に出てきたんでしょ？」

別の女子が身を乗り出してくる。

「どうだったんだ！？」

さらに食いついてきたのは北田だった。

「何だ？そんなにカッブルが気になるか、『この間彼女に振られたばかりで傷心の北田』！」

「それ言っただけー！」

「・・・で、正直なところどうだった？」

「ど、どうって、何が？」

動揺している蘭をよそに、生徒たちは追及の手を緩めない。

「たとえばさ、こんな感じ？・・・『蘭・・・』」

「『新一・・・』」

中道と、同じくサッカー部の会沢が向かい合って小芝居を始めた。

「こら、あんた達がやったらダメ！気味悪いわよ」

女子の一人が一蹴した。

「で、早い話、いい雰囲気だった？キスとかした？」

園子がかかなり露骨に言った。

「そっ・・・そんな、き、キスまでしてないわよ！！」

むきになって反論するが、2年B組の野次馬根性はとどまるところを知らない。

「『まで』って事は・・・それ『以前』のことは何かあったわけ？」

「抱き合ったとか！」

集団の後ろのほうにいた男子が声を上げると、口笛やら歓声やらが巻き起こった。

「ち、違うわよ！ただ、一方的に・・・！」

「『一方的に、なに？』」

生徒達が一斉に、耳に手を当てて身を乗り出してきた。

「ちよつとこれは一部始終を聞く価値、十分あるんじゃない？」

園子の強引な提案。蘭も、ここまできたら、合意するしかなかった。

一言一言状況を話すたびに、いちいち反応が返ってくるのはかなり
疲れるものだった。

「・・・で、それから？」

「これで終わり！」

「えゝっ！？」

「ほんとにそれで終わり？」

「そうよ！そこで園子に起こされたんだから・・・」

「おいおい鈴木いゝ！」

やや非難の目が園子に向けられた。

「いいところだったのに・・・」

「しょうがないじゃない！その時蘭がどんな夢見てたかなんて分かん
なかったし、早く起こして話を聞きたかったんだもん！」

園子は生徒達に苦笑いをした後、蘭のほうに向き直った。

「それにしても、何も言わずに抱きしめるなんて・・・ダンナもな
かなかやるわね」

「だから、夢の中での話でしょ！？」

蘭が反論したが、園子は不敵な笑みを返した。

「正夢だつたりしてゝ」

「・・・まさか！」

蘭は呆れた顔をして前を向き、自習プリントにとりかかった。

間もなく、

「おい、先生帰ってきてるぞ！」

と会沢が叫び、生徒達が蜘蛛の子を散らしたように自分の席に帰っ
ていった。

先ほどより、教室はずっと静かになった。

蘭は、頬杖をついてふっと窓の外を見つめた。

『正夢だったりして♪』

(・・・だったらいいな・・・)

本当のことを言えば、まんざらでもない夢だった。

『帰ってくるって言っただろ?』

(うん、言ってたよね、新一・・・)

蘭は、ふっと笑みを浮かべた。

さて――

かの『大バカ推理之助』は結婚式場にいた。

気がつけば、目の前には『新婦控え室』。

ドアを開けると、そこには3人の女性の背中が見えた。

「うん！いいじゃない！」

と、鏡台の前で騒ぐのは、茶髪のボブカットの女子。

「めっちゃ似合ってるで！」

とは、ポニーテールの女子の言葉。

「そ、そうかな・・・？」

と、鏡台の前に座り、遠慮がちにつぶやくのは・・・

ウェディングドレスを着た・・・

（ら、蘭・・・）

思わず見とれて、声も出ずにそこに突っ立っていた。

（そ、そっか、今日は結婚式なんだ・・・）

そう、ぼんやりと認識した。

（蘭と、俺の・・・）

結婚式・・・と、何度も頭の中で反芻して、舞い上がっていた。

「ええな、アタシもこないなドレス着てみたいわあ」

「和葉ちゃんだって、きつと、もうすぐ着ることになると思っつよ？」

蘭は和葉にそう微笑みかけた。

「・・・服部君と！」

「え！？な、何言つてんの、蘭ちゃん！」

和葉は慌てて手を振っていた。

「それにしても、こーんなきれいな蘭の花婿は、ほんとに幸せ者よねー」

（・・・だよな？）

勝手に納得していた。

次の瞬間までは。

園子がこちらを振り返った。

「あ！？いつからいたのよ？一言ぐらい言いなさいよね！」
それにつられて蘭もこちらを向いた。

「あ・・・！」

椅子から立ち上がると、こちらに歩いてきて・・・

・・・視線を合わせるために屈んだ。

・・・え？

・・・屈んだ？

「お祝いに来てくれたんだね、コナン君！」

・・・は？

「・・・えええええっ!？」

思わず叫び声を上げて、鏡台の方へ走る。

（嘘だろお!？）

鏡に映っているのは、紛れもなく、眼鏡をかけた小学生だった。

（小学生は結婚できない・・・よな？）

当たり前のことを思い出すのにも時間がかかった。

「どないしたん、コナン君？」

和葉が覗き込んできたが、とても答える気にはなれなかった。

（蘭・・・誰と結婚するってんだよ！？）

『工藤新一』とでないなら・・・いったい誰と。

「あ、ねえ、コナン君！」

「・・・なに？蘭ねえちゃん」

再び蘭に『コナン君』と呼ばれ、半ば諦めたように答える。

「新一に伝えといってくれる？まだ『ちゃんと待ってる』って」

「・・・う、うん・・・」

（できれば結婚しないで待っててほしかったんだけど・・・）
それは贅沢だったのか。

「あと、『幸せになるから安心して』って」

『自分が幸せにする』というのは自惚れだったのか。

蘭本人が『幸せになる』と言っているのなら・・・

自分より幸せに出来るような人物なら、妥協しようと思った。

が、その相手が誰だか確かめないことには・・・

「あー、コナン君みーつけた！！」

「え？」

歩美達がドアを開けて入ってきた。

「こんなとこにいたのかよ！」

「ほら、式場に行って座ってましよう！」

「お、おい!!」

引きずられるように、コナンは教会風の式場へ連れて行かれた。

まもなく、蘭が小五郎と一緒にバージンロードに現れた。

皆が一斉に拍手を送る。

小五郎は半泣きだった。

正直なところ、コナンも泣きたい気分だった。

2人が牧師の前までたどり着いた時、牧師が新郎を呼んだ。

「では、新郎の入場です。どうぞ」

「は、はい！」

まだ声変わりしていない、高い声が入り口のほうから響いた。

(・・・なっ!!?)

振り返ると、そこには・・・

「本堂瑛祐ええっ!?!」

あの、まん丸眼鏡の、ドジっ子・・・

緊張した様子で歩いていき・・・

「うわーっ!?!」

・・・何も無い所でこけた。

(縁起悪っ!)

迷信の類を信じないコナンもそう思ったほど、瑛祐のこけっぷりは酷かった。

蘭と瑛祐に、小五郎は泣きながら語りかけていた。

「蘭・・・こいつの事、幸せにしてやってくれ!」

(普通逆だろ!?!)

「うん、お父さん！」

「らぁーーーーーん!!?」

思わずコナンは声を上げてしまい、光彦にたしなめられた。

（そいつはやめとけ、蘭!!絶対、絶対にそいつよりは俺のほうが・
・・!）

これは、自惚れではなく、あくまで客観的な意見だった。

「まあ、そんなにカツカせんとき、工藤」

肩に黒い手が置かれた。

「服部!？」

「姉ちゃんも幸せになれるやろうし」

「それが絶対無理だって言ってたんだよ！」

「目が黒いうちに姉ちゃんの晴れ姿が拝めただけでもよしとしよう
や」

「誰がするかバーロオ!!」

噛み付かんばかりの形相で言った。

2人はやけに長い誓いの言葉を述べているところだった。

この場から蘭をさらいたい衝動に駆られた。

いや、せめて蘭の目を覚まして・・・

横の席には、哀が座っていた。

「灰原!・・・」

「だめよ」

—『解毒剤』の『げ』も言わぬうちに却下されてしまった。

「では、誓いのキスを」

「らーーーーん!!」

再び叫び声をあげるコナンの肩を、哀がつかまえた。

「やめときなさい・・・」

「けど、このままじゃ・・・」

「それに、目を覚ますのはあなたの方じゃなくって？」

「コナンくん？」

顔を上げると目の前には広げたままの、ホームズの『花婿失踪事件』。

「お目覚めかしら？」

周りを見回すと、少年探偵団たちが覗き込んでいた。

「何か、うなされてたぞ！」

「コナン君、今は読書の時間なんですよ？寝ちゃだめです！」

「・・・夢か・・・」

コナンは苦笑いをしてため息をついた。

「―何を見てたのかしら？」

「・・・蘭の結婚式」

「あら、夢で残念だったわね」

「いや・・・夢でよかった。」

そうだ、現実であつてたまるか、あんなこと。

蘭と瑛祐が、結婚だなんて・・・

『指を切ってしまったみたいです・・・』

『大変！手当てしなきゃ』

『だ、大丈夫！？』

『え、ええ、なんとか・・・』

『もう、そんなに邪険にしないでいいじゃない！瑛祐君に、いつでも遊びに来ていいって言ったの、お父さんでしょ？』

考えれば考えるほど、自信がなくなってきた。

（・・・まさか・・・な？）

• 思えば自分は、電話をしているとはいえ、実質、蘭をほつたらかし・

（・・・まさか・・・な？）

*
*
*
*
*
*

蘭はご機嫌な様子で窓の外の青空を見つめていた。

（そうだ、ちょっと、新一に・・・）

コナンは、落ち着かなくなって、目の前の小説を閉じた。

（一応、念のため、蘭に・・・）

2人は、同時に考えた。

（・・・今日、電話しよう・・・）
（

—
جـ

3 コマ目：勿体ない夢（後書き）

作者より　どうも、しょっちゅうコナンたちが夢に出てくるMであります。こないだなんか、小栗旬までが出てきてました・・・重症だな（^^;）

この話、もうちょっと後に投稿する予定だったんですが、サンデー本誌で、組織関連の話が動いてるので、「瑛祐がドジキャラで通用するうちに」と思って、前倒しした上に大急ぎで書き上げました。だから、推敲が足りてないかもですm（　　）m

「介入」のほうの次話は、もうしばらくかかりそうです。（^^;）

えーっと、この後書きも大急ぎで書いてるので、乱筆ながら、この辺で失礼します。
それではっ（走）

3月9日追記

たったった・・・（足音）ガッン！　はあっ！！いすに足ぶつけた
！！！！

・・・てなわけで、戻ってきましたMであります。

何か、パソコンの電源つける前は「あれ書こう、これも書こう」と色々考えてるんですが、いざ書くときになって、「・・・何書くんだったっけ？」となることがよくあります（致命的（-_-;））。

この年でばけてきたのかな・・・（^^;）

というわけで、色々書き忘れたことを書き加えるため、戻ってきました

した。

クラスメイトの「北田君」について。

もともと、北田っていうのはよみうりテレビのスタッフさんの名前らしいです（スワッチこと諏訪プロデューサー曰く）。アニメオリジナルで、上戸彩（↑字、合ってます？）が出た話で、劇中劇の被害者である男子学生の名前が「北田」でした（ややこしいな・・・）。上戸彩に名前を呼ばれて、北田氏のご機嫌だったそうで（^^;）で、私が、2年B組に「北田君」を登場させる決め手となったのは、アニメの「園子の赤いハンカチ」でした。レストランのシーンで、蘭が「・・・でね、北田君、振られちゃったんだって」と言っていたのです、確か（^^;）殺されたり振られたり、つくづく災難ですね、「北田君」（・・・;）

それから今回の話について、ここで書ききれないことを「感想閲覧」のところの返信で語ってるので、見てやるか、って思った方はそちらもどうぞ（^^;）

ちょこつとネタ関連で、前回の刑事さんについて補足。

「高野さん、福井さん、川中さん」はトロピカルマリンランドで「張り込み」していた人なんですが、「田宮さん」はサッカーの天皇杯で、佐藤刑事と一緒にバッグを見張っていた人、「友川さん」に至っては、佐藤刑事の台詞の中でしか登場してない似顔絵描き担当の人です（^^;）友川さん、とりあえず男性にしました。刑事の数を増やしたかったので（^^;）

さて、今回の話は、蘭とコナンの、2人分の「夢」を書いたんで、1話、2話と比べてかなり長くなってしまいました（^^;）しかも後書きまで長くなってるし（^^;）

この小説の感想コーナーで、リクエストを2つ頂きました。ありがとうございますm┐┌m
2つとも、でき次第、投稿したいと思います。(^^)

では、そろそろ失礼します。

4 コマ目：快くない朝

カーテンから朝日が差し込む。

窓の外では小鳥がさえずる。

そんな、さわやかな朝・・・

そんな、のどかな雰囲気を一瞬でぶち壊す『叫び』。

「なによーっ!!」

それが、その日の、青子の第一声だった。

2階から響いた大声に、一足先に朝食をとっていた中森警部は味噌汁を噴き出しそうになった。

「ゲホッ!?ゴホ・・・な、何だあ?」

間もなく、制服姿の青子がのしのしと降りてきて、無言のままテーブルについた。

何やらイラついた様子で、黙々と朝食を口に運ぶ青子。

訳が分からないまま、警部はそんな様子を見つめているだけだった。

やがて、箸を置くと、両手でテーブルをバン、と叩いて立ち上がった。

「―お父さん!!」

「は、はいつ!？」

「絶対、ぜええったい、キッドを捕まえてね!!」

「あ?・・・ああ・・・」

「青子、応援してるから・・・行ってきます!」

またしても、のしのしと歩いて出て行った青子に、警部はため息をついた。

「・・・あんな怖い顔で『応援してる』って言われてもなあ・・・」

数分後。

青子は快斗の家の呼び鈴を鳴らしていた。

「あら、青子ちゃん」

出てきたのは母親だった。

「ごめんね、快斗ったら、まだ起きなくて・・・待たなくていいから先に行っておいて!」

「あ、はい・・・」

玄関を離れて歩き出すと、後ろからツインテールの女子が追いかけてきた。

「青子ー!おはよう!」

「あ、恵子・・・」

「・・・何?元気ないけど、嫌なことでもあったの?」

「・・・いやーな夢を見たのよ」

「夢?」

「そう！最低最悪のね！！」
青子はその一部始終を語った。

「奴だ！！奴が現れたぞ！」

現場には、中森警部の声が響いていた。

「逃がすなー！」

そんな騒ぎも気にしていないかのように、白い怪盗は警備を次々とくぐり抜けて行く。

しかし、その行く手に、一人の人物が立ちはだかった。

「逃がさないわよ！お父さんの代わりに、青子が捕まえてやるんだから！！」

それを見て引き返すキッドを、青子は追いかけた。

「待ちなさい！！」

青子は逃げるキッドの足にタックルして、用意していた縄でぐるぐる巻きにする。

「さあ、観念しなさい！」

と言って仁王立ちになった青子に、キッドはふっと笑みを浮かべた。

「残念です・・・」

「そうねー、もう悪いことはできないものね？」

「いえ、もうすぐ貴女とお別れしなければならないことが、ですよ」
青子は少し首を傾げたが、すぐに合点した様子で答えた。

「ほんとね！もうすぐお父さんがここに来て、あんたを連れて行くんだから」

「ーまたお会いしましょう、お嬢さん・・・」

キッドはますます不敵な笑みを浮かべて立ち上がった。

「もちろん、高い塀の、監獄の中でなく、淡い月の光のもとでね」

「ー！？」

いつの間に、キッドは縄を解いていた。

「残念ながら、私はまだ捕まるつもりはありませんから」

「なっ・・・！」

「怒らないで・・・貴女には笑顔のほうが似合いますよ、お嬢さん？」

齒の浮くような台詞を言われ、青子は苦々しそくに、

「余計なお世話よ・・・！」

と答えた。

が、少しも聞いていないのか、キッドは勝手に青子の右手を取った。

「え？」

そして、手の甲にそつと唇を・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ！」

全身から血の気が引くのを感じた。

「いや――――っ!?!」

「・・・つてわけ!」

「割といい夢じゃない!」

「あのねえ!」

親友の2人だが、どうもキッドに関しては意見が食い違うようだ。
「だって、あのキッドでしょ!?!」

「あのキッドだからよー！なーんでよりによってあの最低男街道だ
んトツ独走まつしぐらの泥棒にあんなことされなきゃいけないのよ
ー！？」

そんな夢を見てしまったこと自体気に食わない、と訝って、こう続
けた。

「あーあ、途中まではいい感じにキッドを追い詰めてたのになー」
「だめよ、捕まえちゃー！」

けらけらと笑う友人にふつとため息をつき、青子は言った。

「まあ、ありがと！誰でもいいから愚痴を聞いてほしかった所だっ
たの」

「なーに？わたし、快斗君の代わりなの？」

「あはは、そんなじゃないけどさー・・・」

苦笑いする恵子に、青子も苦笑いを返した。

「まあ、快斗に話しても、どーせキッドの肩もつんだろっけど」

青子はそう言って、青空を見上げた。

「はーあ、キッドのやつ、捕まえてやりたいなー・・・」

「じゃあ青子も刑事になって、『捜査二課の名物刑事、中森親子』、
とか？」

「あはは！それいいかも！」

青子は声を上げて笑った。

放課後の帰り道。

青子は、新聞を持った快斗と並んで歩いていた。

「神出鬼没の大怪盗・・・またまた華麗に宝石を盗む、か」

満足そうに快斗は笑っていた。

「・・・ねえ！快斗ったら！」

「なんだよ？」

青子に袖を引つ張られながらも、新聞から目は離さなかった。

「聞ってるの？今日は、青子から重大発表があるんだから！」

「言ってみな？」

その言葉も生返事だった。

青子は咳払いをした。

「えー、私、中森青子は・・・」

「うん。」

「白馬君と付き合います！」

「ふーん・・・」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

「……ええええ!!?」

「……なるほど、黒羽君の思考回路復旧までの所要時間、3秒96……と」

「は、白馬あ!?!」

振り返ると、青子にぴったりくつついた、懐中時計を手にした話題の中心人物がいた。

「な、何でお前が青子と付き……」

「おや、奇遇だね! 3秒96……」396(さぐる)『じゃないか』

「聞けよ、人の話を!!」

「ふむ……8秒98なら『はくば』、9秒68なら『くろば』って所かな?」

「だから、どーでもいいだろ、それは……!」

「えーっと、『なかもり』『あおこ』・・・あーんもう、青子は語呂合わせできないよぉ！」

「気を落とさないで！僕が考えておいてあげるから・・・」

「ホントー！？うれしー！」

「お、おい・・・」

その会話内容、すでにバカップル。

呆れてばかりもいられないので、快斗は『原因』が何か考え始めた。

青子が快斗をほうつて『探と付き合う』、なんて言い出した原因である。

（なんだ、何がいけなかったんだ？）

顎に手を当てて考え込む。

（青子の誕生日は、色々あったけど何とか祝えたし・・・）

横でいちゃいちゃしている2人のせいで気が散ってたまらない。

（まさか、最近仕事ばかりで構ってやらなかったからか！？）

ただ、自分の想像だけではどうにもはつきりしなかった。

「・・・おい、青子」

「なーに？」

「何でそいつと付き合いおうと思ったんだ？」

「えーっとねえ・・・」

ほんの少し間をとった後、青子は答えを告げた。

「白馬君と、協力してキッドを捕まえるのよ！」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

「・・・はあああああ！！？」

「長年キッドを追っている警部の娘に、警視総監の息子の高校生探偵！最強のコンビだと思わない、快斗！？」

興奮気味にそう話す青子に、快斗は、

「は、はあ・・・」

と答えるしかなかった。

（・・・やる気まんまんじゃねーか・・・）

「あ、そうそう、強力な助っ人も呼んであるのさ」

と言った探の後ろには、『そいつ』がちよこんと立っていた。

「こんにちはー、ボク、江戸川コナン！」

「ゲッ!!?」

思わず後ずさりする快斗にコナンはにっこり笑いかけた。

「よろしくね、快斗兄ちゃん!」

一瞬、その幼い笑みに、相手を見透かそうとする『探偵』の顔が垣間見えた。

「ははは・・・」

「わー、コナン君かわいー! きっと快斗なんかより、かつこよく育つに違いないわ!」

水を差すようだが、成長したら同じ顔である。

青子とコナンから少し距離を置いたところで、探は快斗に耳打ちした。

「安心したまえ、君がキッドだということはあのボウヤには教えてないからね」

「だから、オレはキッドじゃ・・・」

その反論には構わず探は続けた。

「まあ、その辺は僕もフェアにいろいろと思ってね」

「いや、フェアもなにも・・・」

またしても快斗には耳を貸さず、

「じゃあ、また現場で会おう・・・」

と言って、肩をぽんと叩いて離れていった。

「おいおいおい・・・」

3人は実に『仲良く』会話をしていた。

快斗の事はほったらかしで。

「ねえ、青子姉ちゃん! 今度キッドが狙ってるのは何だっけ?」

「えーっと、世界最大級のガーネットだったかな?」

「また難解な暗号を使った予告状が出ているようだよ．．．これがその文面」

「わー、見せてー!」

「おーい．．．」

「まあ、立ち話もなんだから．．．」

「どこかファミレスにでも寄ろうか!」

「あ、じゃあボク、お子様ランチー!」

「おー！ー！ー！ー！ー！ー!」

小さくなっていく後ろ姿をただ見送るしかない快斗。

―その時。

「クスクスス．．．」

世にも不気味な笑い声が背後から聞こえた。

「え？」

「邪魔者がいなくなっただわね、黒羽君？」

「あー．．．紅子．．．」

冷や汗をたらして、数秒の沈黙。

「．．．じゃ、オレはこれで」

「待ちなさい」

がしつと腕を掴まれた。

「今日こそあなたを私の虜にしてみせるわよ．．．」

「．．．勘弁してくれよ．．．」

「フフフ．．．準備は整っているんだから」

紅子の腕に抱えられているのは．．．

怪しげな首飾りに怪しげな水晶玉に怪しげな薬にお札に金槌に五寸

釘にわら人形・・・

「おい、最後の方めちゃくちゃ古典的じゃねーか？」

問答無用、と言わんばかりに紅子はなおも妖しい、いや、怪しい笑みを浮かべた。

「ほほほ・・・もつと人目のない所へ行きましようか？」

快斗の腕を掴む紅子の手に、さらに力がこもった。

・・・

「ぎゃ~~~~~~~~っ!!?」

そこで目が覚めた。

「・・・・・・・・」

しばらく上半身だけ起こしたまま呆然とする快斗。

「・・・は、はは・・・夢か・・・」

乾いた笑いが漏れた。

「ははは、夢だよな、あんなの・・・うん、そりゃそうだよな・・・

あー、びつくりさせやがって」

「快斗ー！遅刻するわよ！朝ご飯できてるから、早く降りてらっしゃいー！」

「へーい！」

母親の声に促され、制服を着て階下へ向かった。

（あんな夢見た後じゃ、当分は何見ても驚かねーな・・・）
と思っていた。

朝食の並んだテーブルにつくまでは。

「――！！！」

・・・

「ギョーーーーーッ!!?」

後方の民家から聞こえたその叫び声に、青子と恵子は思わず振り返った。

「・・・今の、快斗君の声だよね?」

「・・・うん。」

「・・・何があっただら?」

「うーん・・・」

青子は少し考えた後結論を出し、何事も無かったかのように再び歩き始めた。

「ほつといて、先に行こう、恵子」

「え?何か分かったの?」

青子は数歩進んでから、立ち止まって振り返った。

「・・・たぶん、朝食に魚が出たのよ」

「・・・」名答。

4 コマ目：快くない朝（後書き）

作者より　どうも、最近他のファンサイトで、同じHNの方を見かけたMであります（^^;）イニシャルの、アルファベット1文字のHNって逆に少ないかなーと思っていたんですが、あら、いらっしやったようです（^^;）

4 話目、遅くなりました（^^;）

今回燈子さんから「（3話について）同じ状況の快斗が見たい」というリクエストを頂き、この話に至りました。リクエスト、ありがとうございました（^^）前回とは少し構成を変えてみたんですが、いかがだったでしょうか？

なんとなく、まじつく快斗に出ていた「魚」と「探の時計」の小ネタを使ってみたかったので、いっぺんに詰め込みました（^^;）あれれ？（↑コナン風に）なんか、回を追うごとにどんどん文が長くなってきてる気が・・・（^^;）

余談ですが、4巻に出ていた「秀峰美術館の近藤館長」・・・奥付の「編集」に「近藤秀峰」という名前が（^^;）

そういえば、コナンの、甲子園の爆弾事件（未遂）にも、「鳥光さん」という方が出てきて、やはりその名前も奥付にありました。

あ、そういえばゴールデンアイで青子が読んでた新聞も「鳥光新聞」・・・ということは、ブラックスターで快斗が読んでた「浅井新聞」も、当時の編集さんの名前？（^^;）

話ががらつと変わりますが、最近山口勝平さんのブログをちょくちよく見ています。で、「なんか快斗と山口さんって似てるかも」と、ふと思いました。髪形とか、お茶目（？）なところか（^^;）で、松尾氏や高山さんみたいに、原作に出ている山口さんを想像してみ

たりする（^^;）

さて、今回は、ブータロさん改めブータローさんからのリクエスト、「山村刑事の話」を書こうと思います！（多分これから先、『介入』と交互に投稿すると思います）

これらのリクエストのおかげで、6話だった連載予定が伸びそうです♪ありがとうございますー（^^）

では、ひとまずこれにて。

5 コマ目：戻せない時間

群馬県警。

電話のコールが鳴り響いた。

「あ、ちょっと、君、取っちゃってくれないかなあ？」
部下にそう呼びかけたのは、刑事の中では珍しい、人のよさそうな顔をした、お化けの類が苦手な、あの――

――山村刑事である。

「はい、捜査一課……」

数十秒後、電話を切った後、その部下は早口に言った。

「すぐ傍のXX山中で遺棄事件です！」

室内の刑事たちの視線は、一瞬にしてその電話を取った刑事に注がれ、次いで、奥の席についている、四角い顔の刑事長に向かった。

「――よし」

彼は重々しく口を開き、立ち上がった。

「すぐに現場に急行だ！山村、任せたぞ！」

「はい、刑事長！」

山村刑事は敬礼をすると、急いで仕度を整え、部屋から飛び出そうとした。

そこに、さらにかかってきた一本の電話が場の空気を一変させる事となる。

「山村さんに、だそうですが」

若い刑事がそう言つと、山村刑事は慌てて引き返し、受話器を受け取った。

「はいはい…何だろうねー、一体」

受話器はを耳に当てた直後、その不思議そうな顔は消し飛んでいた。

「え？」

但し、それは刑事の顔とも違うものだった。

「おばあちゃんが…倒れた？」

電話をとりついだ刑事をはじめ、今まさに現場に急行しようとしていた者まで、一課の全ての視線が、山村刑事に集まっていた。

「はい…分かりました…」

力無く、呆然とした様子で受話器を置いた。
見兼ねた刑事長が、歩み寄って肩を叩いた。

「山村、行つてやれ」

「・・・え？でも・・・」

「バカヤロ、お前がおばあちゃんっ子だって事ぐらい、俺達は百も承知なんだよ！」

周りを見回すと、みんなが力強く頷いていた。

「でも、事件は・・・」

向き直つてそう言いかけると、刑事長は再び肩をぽんと叩いた。

「任せろ、俺も直接行ってくる。お前の分まできっちりカタつけて来るからな！」

「刑事長・・・」

すでに山村刑事は涙声になっていた。

「ほら、泣いてないで行つてこい！」

「刑事長！タクシー呼びました！」

準備のいい部下の一人が、受話器を置きながら言った。

刑事長は、それに頷くと、語りかけるように言った。

「―過ぎた時間は、戻せないんだからな」

「・・・はいっ！」

涙を拭つて敬礼をすると、山村刑事はドアへ駆け出した。

「失礼します！」

間もなくタクシーは到着し、ドアが目の前で開いた。

「お客さん、どちら・・・」

「駅！駅まで、飛ばしてくれちゃってくださいー！」

運転手が質問を言い終わる前に、畳み掛けるようにそう言った。

「・・・了解です！」

運転手はよほどの事であると察した様子で、帽子を被り直して前を見据えた。

「つかまつといってくださいよ！」

―新幹線の中。

あとどのくらいで鳥取に着くのだろう。

手を組んで、床を見るともなしに見ているだけで、外の景色を見る気分にはとてもなれなかった。

『風邪をこじらせて、肺炎になっちゃったみたいで―』

電話口の伯母は、確かそう言っていた気がする。

正直、じっとしていたくない、というのが本心だった。

ただ、じたばたしてもどうにもならないのは分かっている。

『過ぎた時間は、戻せないんだからな』

「おばあちゃん・・・」

祈るしか、今は出来ない。

八頭の、祖母の家に駆け込んだとき、出迎えたのは電話をしてきた伯母だった。

「ああ、ミサオ君・・・おばあちゃんは、奥の部屋」

自分の両親はもちろん、かなりの数の親戚が集まっていた。

囲まれるようにして、床についているのが、祖母だった。

「――ミサオちゃん？」

多少咳をしながら、首だけをこちらに向けた。

「おばあちゃん・・・」

急いですぐそばに座る。

「この歳まで元気だけが取り柄だったんだけどねえ・・・」

細い目でじつと天井を見つめていた。

「もう、そうもいかないのかもね」

もう一度首を動かして、にっこりと微笑んだ。

「ああミサオちゃん、この間、横浜の遊園地に連れて行ってくれたよねえ」

「うん・・・」

唇を噛みながらゆっくりと答えた。

「本当に、楽しかった...きつと、向こうに行っても忘れないよ...」

「おばあちゃん!..!」

そんな、弱気なことを言っただけでほしくなかった。

もつと、長生きしてほしいのに。
もう会えなくなるなんて…

「ああ、また泣いてるねえミサオちゃん」

咳をしながら、顔をよく見ようとしているのか、体を大きく傾けた。
「ほんと、ミサオちゃんは昔から泣き虫だったね…でも」

布団から手を出して、目をしきりにこすっている孫の方に伸ばした。
「そこが、ミサオちゃんのいい所…人のことを考えて、人のために泣いてあげられる…」

一層、彼女の笑顔が輝いたように見えた。

「刑事さんをやっても、それを忘れないでね…」

やがて、彼女はゆっくりと目を閉じた。

「…おばあちゃん!!」

山村刑事…いや、ミサオは、枕元に飛び付くようにして、祖母の体をさすった。

「眠ったらだめだよ、眠ったら…」

拭っても、拭っても、涙が膝に落ちていた。

「起きてよ、まだしてあげたいことは、いっぱいあったのに…おばあちゃん…」

しばらくの沈黙と、すすり泣きの後だった。

「あーっとお!!」

「え!？」

親族全員が顔をあげて固まった。

…おばあちゃんがいきなり飛び起きたのである。

「いやー、忘れる所だった、危ない危ない」

硬直したままの親族をよそに、背伸びをした後、布団からはい出る。

「あれー、今日の新聞はどこじゃったかなあ？」

ミサオの伯母が、恐る恐る畳の上にあつた新聞を差し出した。

「おー、ありがとうね。」

そしてリモコンを掴み、いそいそとテレビの前に座つたのである。

「はーあ、最近やつとビデオ録画を覚えたのよ」

「…何録画するの？」

そうつた質問しか、しようがなかった。

「ほら、『冬の紅葉』の再放送だよー!」

「…え?」

「あれ、本当にいい話だったからねー、録画しておけば良かったって後悔してたんだけど…」

そう言つて振り返つた顔には、満面の笑みが満ちていた。

「この時間に再放送するって聞いたからね！もうこの機会を逃すわけにはいかないんだよ！」

親族の口は、これでもかと言わんばかりにかっ開いていた。

「いいかい、良くお聞きよ…過ぎた時間は戻せないんだからね！」

うきうきとリモコンを操作するおばあちゃんに、遂に根本的な質問がなされた。

「おばあちゃん……大丈夫なの？」

「あの……肺炎は？」

振り返ったおばあちゃんはきょとしていたが、やがて、首を傾げて、言った。

「あれ？」

⌈
:
⋈
⋈
⋈
⋈
!
!
⌋

次の瞬間、脱力した親族たちが、畳の上に次々と転がったのだった。

後の、医者の話だと、『何故だか知らないけど完治してしまった』とのことだった。

―突然だが、『恋をする女性は若くいられる』―らしい。

おばあちゃんが『冬の紅葉』を見ておじいちゃんとの青春時代を思い出したかどうかは知らない、が。

「―録画、つと。あー、丁度始まった！ほら、皆もこっちに來て見てごらんよ！」

『たぶん、あと数十年くらいは長生きできるんじゃないか』

―そんな、確信に近い予想が、安堵と共に浮かんだのだった。

5 コマ目：戻せない時間（後書き）

作者より（もはや反省会）　こんにちは・・・遅くなりましたっ（TT）またこの言葉で書き始めなければならない自分がふがないです（- -;）ちなみに期末明けです。

ブー太郎さんからのリクエスト、「山村刑事の話」ということで、どうにか投稿にこぎつけました（^^;）満足のいく結果になったかどうか（^^;）いかがだったでしょう？

せっかくの山さんの特徴的な喋り方があまり書けなかったのが悔いですけれども（^^;）さて、いったいこの話はほのぼのなのかコメディなのか・・・

今回のおばあちゃんに似た例として、私は『紺碧の棺』を見に行く数日前に風邪をひいたのですが、しかし「絶対に見に行くー！」という根性（?）で、ばっちり当日に治したことがあります（^^;）いつもはするずる長引くの・・・

また思いついたことがあったらこの後書きをいじくるかもですが、妹が帰ってきて、見られかねないので、ひとまず、この辺で（^^; ;）

6 コマ目：忙しい夏・前

『さあ、今年もこの季節がやってまいりました！』

夏―だった、その日は。

夏休み真っ只中。

『高校球児達の夢舞台―勝ち上がるのはどの校なのでしょう！？』

殊に、慌ただしい一日であった。

この1日をそれぞれが後生記憶にとどめるかどうかは知らないが―

『今日は4試合が予定されています！』

とにかく、そんな一日・・・

『ごーお、ろーつく、しーっち・・・はあち！！』

何故か『八』の前を妙にためた、威勢のいい掛け声―そして第2体操の深呼吸―が終わると、子供たちは一斉に前でお手本をしていた人達の元へ駆けていった。

「はーい、みんな並んでー！」

いつものように、コナンと哀は慌てず騒がず、空くのを待っていた。『それでは皆さん、さようならー！』

軽快な音楽と共にラジオ体操が終わりを告げた頃、真っ先に走っていた元太をはじめ、歩美、光彦がスタンプ授与という儀式から戻ってきた。

「あーあ、もう少しで一番乗りだったのよー！」

「わーっ！！ セミさんがとまってるよ！」

歩美にかかれば昆虫さえも『さん』付け。平和だ。

「よし、オレが採ってきてやる！！」

「えーっ、元太君、手で捕まえるんですかぁ！？」

「・・・ホント、元気ね・・・」

「ハハ・・・ついていけね・・・」

『えー、53歳の男性の方から、メッセージが届いています。』この季節が来るたびに、白球を追った学生時代を思い出します。今年の大会も、選手の皆さんには、高校生らしい、はつらつとしたプレーを期待しています、との事です。』

高校生ながらもはつらつとしていない者が若干名いる中・・・日が少し高くなり、セミがけたたましく鳴き始めていた。
—そう、そんな季節だったのだ。

その日、高校は全国的に登校日だった。
帝丹高校も例外ではない。

ところが、その時間の2年B組は先生急病のため、自習。
かれこれ続けていたおしゃべりにも飽き、やがて全員が勉強を始めた。

教室の中の音と言えば、鉛筆を動かす音と、それをはるかに上回る音量のセミの鳴き声のみの、はずだった。

「キャーーーーーッ！！！」

――『惨劇は突然に』・・・

ラブストーリーだろうが何だろうが、始まりはいつも突然なのだ。

「いやーっ!!」

「え、何!？」

「うわーっ!？」

「ギャー――ッ!!」

まるで最初の叫び声に触発されたかのように、叫びは瞬く間に教室全体に広がった。

無論、その触媒となったのは別の、『あるモノ』だったのだが。

そして、生徒たちは次々と席を立ち、ある者は荷物を抱きかかえて教室の中を、おびえながら動き回った。

「あーっ、動いたー!!」

「おい、そっち行っただぞ!!」

「え、ウソ!!」

「ワーーーーッ!？」

『ボールの行方には、十分ご注意くださいませ・・・』

「おい、お前ら、自習中だろ!？ うるさいぞ!!」

ドアを開けて、隣のクラスの強面の先生が現れた。

「キヤーキヤー騒いで、何事だ!？」

傍に居た生徒が、がたがた震えながら床のある1点を指差した。

今や、2年B組の生徒全員が、『それ』の一挙一動を見守っていた。

で、一挙一動を見守られていたのは・・・

「・・・ハッハッハ！ なーんだ、ゴキブリか！・・・」
先生は威勢よく高笑いしたが・・・。

『空振りー、三振ー！』

数秒の沈黙。

「・・・じゃ、俺は戻るぞ」

閉まるドア。

『あーっと、振り逃げだあー！！』

「つて、えー！ー！ー！つ！！？」

「先生ー！ー！ー！！」

「そりゃねーよー！！」

先生の、意外な一面だった。

いや、それより生徒たちは、先生がなんとかしてくれるのではない
か、という期待を裏切られたことがショックだった。

そして、大阪の改方学園でも似たような事態が・・・

低い、唸るような羽音とともにそいつはやって来た。

「あーっ、蜂や、蜂ー！！」

「えーっ、何でー！？」

「そら、窓開けとつたからに決まっとするやろー！！」

「せやから、窓閉めとこ言うつつたのにー！！」

「えー、あんた言うつつたっけ？」

「はよ出ていかんかな・・・」

「あーもっ、授業中やで！？ 集中やー！！」

これは先生だ。
が、誰も聞いていない。

「うわー、平次、蜂やて・・・」

無意識のうちに頭を低くしながら、隣の幼馴染に呼びかけた。

「アホ、なに蜂くらいで怖がつてんねん、和葉」

「せやかて、刺されたら、毒があるんやろ!？」

「まあ確かに、もしアナフィラキシーショックとか起こしよったら、はよ治療せな命に関わるけど」

「えーっ!?!？」

「騒がんでええ! 刺されんかったらええ話や!」

「ど、どないしたらええん?」

「せやな、まずは絶対に手で払ったりせんこと。余計狙われるからな」

「うん・・・」

「あと、蜂は黒いもん狙うて言われてるから、近くに來たら頭を隠すとか・・・おい和葉、今せんでええ!」

そこに割り込んでくる後ろの男子。

「服部、遠山に色々教えて、優しいなあ?」

「やかましいわボケ!!」

そして、その隣の女子。

「はーあ、最愛の妻を必死に守る旦那・・・うらやましいてしゃーないなあ!」

「だっ・・・だれが『旦那』や!!」

とどめは、教科書で頭を隠している和葉。

「なあ平次・・・あんた、全身黒いけど、どないするん?」

「ほっとけ!!」

「おい、皆、勉強しよ? な?・・・」

先生の呼びかけは、蚊の鳴く声のように虚しかった。

『いやー、今回の攻撃がまだ続いています！ 快進撃が止まりません！』

『このチームは1人1人にパワーがある上に、つながりもありますからねー、相手側が圧倒されてますよ。この場面をどう抑えるかが、相手バッテリーの腕の見せどころ・・・』

『打ったア、大きい！』

時間軸が少々飛んで、江古田高校。

ー快晴。

そろそろと生徒たちが学校を後にする。

「快斗ー！ 帰ろ！」

「へいへい・・・」

「ーあ、何アレ？」

「どうしたの恵子？」

「ねえ青子、あの雲、緑色してるように見えない？」

「あ、ほんとだ」

「青子にも見える？ じゃあ、見間違いじゃないんだ・・・」

「なんか気味悪い・・・」

「気をつけて・・・あと30秒後に雨が降るわよ」

「えっ？」

背後には、いつの間に紅子。

どこからともなく傘を取り出していた。

「えー？ こんなに晴れてるのに・・・」

ーやかましかったセミの声が、ぴたりと止んだ。

ザーーーーーーッ

「キャーーーーッ!!?」

まさにバケツをひっくり返したような、いや、全国の滝を集結させたような雨。

あつという間に、どす黒い雲が青空を飲み込んでいた。

「あ、紅子ちゃん、なんで分かったの?」

びしょ濡れの青子が、鞆をかざしながら尋ねる。

「フツ・・・わけもないわ、ルシユファアの予言が・・・」

傘の下で長い髪をかき上げる紅子。

「よ、『よげん』?」

「バーロオ」

そこへ快斗が口を挟んだ。その手には傘。

「なーにが予言だよ、天気予報で分かるじゃねーか、そのくらい」
一瞬、紅子の眉が訝しげに顰められた。

「あー、あの雲って夕立の前兆だったんだ・・・」

と恵子。・・・その手にも傘。

「え、えーっ!? 傘持つて来てないのわたしだけ!?!」

『あーっと、堅守を誇る内野陣にミスが続いてしまいました・・・』

「ちゃーんと言ってたぞ、『所により夕立』って」

と言って快斗は傘を揺らした。

「なんで教えてくれなかったのよお!!」

「オメーが天気予報も見ないほどアホだとは思わなかったんだよ!」
「なによーっ!!」

青子は、なおも雨に降られながら頬を膨らませた。

『こうなつてくると雲行きが怪しくなつてきますね!』

怪しいどころではなかった。土砂降りはおも続く。雷まで鳴り出した。

「きゃーっ!」

「ーったく、しゃーねーなあ」

快斗は再び傘を揺らした。

「入れよ、青子」

「え？」

「入れつつてんだよ、万一カゼでもひいてオレのせいにされちゃたまんねーからな」

「・・・」

数秒後、青子は言われたとおりに傘の下に入った。

「・・・そーよ! わたしがカゼとか、肺炎になっちゃったら、快斗のせいだからね!」

「オメーなあ!!」

「だつて教えてくれなかったもん!!」

「・・・まあ、馬鹿はカゼひかねーけどな!!」

「ちよつと、アホとかバカとか言わないでよ!」

「うるせー、傘の下から出しちまうぞ!」

などと言い合いながら、2人の後ろ姿は遠ざかっていった。

『センターフライ、3塁ランナータッチアップ・・・』

「わーっ、2人ともお似合いー!」

ニコニコ笑つて、恵子は紅子の方を向いた。

「ね、そう思・・・、つて」

紅子は2人を睨みつけて、静かに怒りに燃えていた。

「相合傘・・・相合傘・・・私以外の女と相合傘・・・」
「えーと・・・小泉さーん？ 小泉紅子さーん？」

『あーっとセンターからレーザービームの如き物凄い返球！ 飛び出したランナー、急いで戻ります！』

「みてらっしゃい、今にその場所を私の指定席にしてみせるわ・・・！」

顔には怒りを通り越して笑みまでもが浮かんでいた。
「もしもーし？」

『中継に入るショート、あっと取れない取れない！』

『いやー、センターの返球、威力が凄すぎたんですねー、一方でショートがそれに慣れてない。このショートとセンター、あとでキャッチボールの練習しておいたほうがいいと思いますよ。』

「その日を楽しみにすることね、黒羽君！ おーっほっほっほっほ・・・」

謎の高笑いを残して、紅子は去って行った。

「・・・おーい・・・」

『しかし結局ランナーは釘付けーっ、動けません！ 一二死で、ランナー3塁は変わりません！』
ツアフト

会話のキャッチボールは、大暴投の末、終わりを告げたのだった。

時間軸が戻り、帝丹高校。

「なー、先生逃げちゃったし、どうする？」

「誰か虫取り網・・・」

「持つてるわけねーだろ！」

「あ、確かアタシの鞆に虫除けスプレーが！」

「もう虫居るから！ 意味ねーじゃん！」

「あーっ、動いたーっ！！」

「はいはいはい、皆さんお静かに、注目ー！！！」

手を叩いてクラスメイトの注意を引いたのは、園子だった。

「何だよ鈴木……」

「まあ落ち着いて……」

もったいぶった様子で口を開く。

「ゴキへの対処はまだ思いつかないけど、まずは責任が誰にあるかはつきりさせておいた方がいいと思うの」

「責任って？」

目線はゴキブリの方へ向けたまま、隣に居た蘭が尋ねた。

「……さっきね、床に落ちてるパン屑を見つけたのよ」
教室の中がどよめいた。

「この推理クイーン園子様の推理によれば、ゴキは、誰かが食べ散らかしたパンを狙って現れたに違いないわ！！」

全員が顔を見合わせた。

「さあ、名乗り出なさい！！」

静まり返る教室。

『一球目、投げたあ、打った、ファール！！』

「……しょうがないわね、1分間だけ猶予をあげる……制限時間内に名乗り出ないと、蘭の鉄拳が飛ぶわよ！！」

「えーっ！？ なんで！！？」

一番驚いていたのは蘭本人だった。勝手に引き合いに出されるとは。
「さあ、今からカウントダウンよ！！ よーい……」

『 Windアップから2球目・・・ 』

「 スタート!! 」

『 投げたあ、インサイド直球!! 』

「 悪い!! 」

『 球審の右手が拳がったー、決まったストライク!! 』

「・・・俺だ!! 」

「 会沢あー!!!!!! 」

『 ツーナッシング、追い込まれました!! 』

追い詰められた会沢。

そんなこんなで過ぎてゆく時間・・・

『 三振ー!! 』

そんなこんなでいい加減多くなった文字数・・・

『 さあ、延長戦に突入です!! 』

一話完結の短編集のはずだったのに前後編・・・

書き切れないほど、色々なことがあった一日・・・

そんな一日だったと理解して頂けたら、幸いである。

『10回の表、丘陵高校の、攻撃は・・・』

―夏、だった。

6 コマ目：忙しい夏・前（後書き）

作者より　　どうも、初めて携帯からの投稿に挑戦したMであります。本当は先に『介入』の更新をするはずだったのですが、予想以上にはかどらなくて…（＾－＾；）このままだと（夏を振り返る話とはいえ）この話を投稿する頃には完全に秋になってしまいうなーと思ったので先に投稿しました…ああ、計画性ないです自分。さて、テンポのいいどたばたな話を書きたくなくてできた今回の話ですが、いかがだったでしょうか？野球中継との掛け合いは、自分では頑張った所なので、ご意見、ご感想いただけたらうれしいです（＾－＾）では、後編に続きます（笑）

7 コマ目：忙しい夏・後

エルクンバンチエロ。

確かそんな曲名ではなかったろうか。高校野球の試合中に演奏されるクラシックだ。他に演奏される曲といえば『タツチ』『ねらいうち』など…この2つはともかく、『ルパン三世』が同様に頻出する理由を、誰か教えてくれまいか。ひょっとして、某カリオストロよろしく『観客の心を盗む』とか、そういう事なのだろうか。

「「かーつとーばせー！！い、な、おー！！」」

甲子園。そこは球児のみならず、吹奏楽部や応援団も全国区になりうる場所だと言えよう。

中には炎天下にも関わらず帽子なし、という、ひょっとすると選手に負けず劣らず過酷かもしれない状況にいる人も。

…さて。

同様の炎天下、応援に声を張り上げる高校生がいる中…

「あっちいいいい……」

音を上げる高校生も、ここトロピカルランドにあり。

「コナンくん！哀ちゃん！」

「おいてくぞー！」

「無茶言ってんじゃないねーよバーロ……」

『今日は雲ひとつない日本晴れとなりました。いやー、白球を追う

球児の姿がまぶしい甲子園球場です！」

太陽もアスファルトの照り返しもまぶしいトロピカルランド。

「あらあら、サッカーフィールドを走り回るスタミナはどこに行ったのかしら工藤君？」

横を歩く哀が笑いかけた。

「何よりあいつらのテンションについて行けねーんだよ……」

「…それと、日本代表の勝利に部屋を駆けずり回った、あのはしゃぎっぷりは？」

「ほっとけ……」

再び、くすり、と笑った哀は数メートル先を歩く4人に視線を移した。

「子供って、こうと決めた事にどこまでも夢中になるものなのよね

…あの子達の楽しみようも、そこから来ていると思うのよ」

「ま、言ってるな」

「あなた、事件以外の事にも興味を持ったらどう？」

「はっ……」

コナンはとびきりの苦笑をひねり出した。

『さあグラウンド整備が始まりまして、選手達はベンチに一旦下がります。』

「あそこのレストランに入りましょう！」

光彦がしゃれた外装の建物を指さした。

「そうだね光彦くん！ 歩美、喉がかわいちゃった！」

「おう、オレも腹ぺこだぜっ！」

「いや元太、お前はいつもだろ」

『この炎天下、熱中症対策に水分補給は欠かせません！』

「今日の気温は32度まで上がるらしいわよ…博士、売店でトロツピーがマリリンの帽子を買ったほうがいいわ」

魅惑の『食事つきの日影』に向かって歩きながら、哀は提案した。横で、その姿を想像したコナンがふきだした。

「そうかのお…」

「ええ。もはや守る物がなくなった博士の頭皮に、この紫外線はあまりにもきついもの」

『あーっとデッドボール！これは痛い！』

『ストレートですね…』

『ええ、内角低めの直球が当たりました…当たった所を押さえて座り込んでいますが、果たして…』

「大丈夫かー…？博士ー…？」

気遣うようにコナンが声をかけるが、博士は柄にもなく暗い表情で放心していた。

「おい灰原…今のはブラックすぎるだろ」

「あ、ごめんなさい…」

もう黒ずくめじゃないのにね、と言う哀に、コナンは閉口した。

ああ、夏まつさかり。

アルプススタンドのトランペット、トロンボーン、ホルンやらの金属光沢が眩しい。

甲子園の魔物に打ち勝ち、勝利を手にするのは果たして…

ところで、帝丹高校2-Bの生徒は、その体の光沢さえもおぞましい、黒い悪魔と対峙していた。いや、たった今現在の状況としては、どっちかというギリで会沢のほうが目を集めている。

「あーいーざーわー…」

クラスメイトのうらみがましい視線が刺さる。

「こうなるとは思ってなかったんだよ…悪かったってば！」
会沢は顔の前でパン、と音を立てて手を合わせた。

「とにかく。わたしのこの灰色の脳細胞によれば…」

どうも園子は『推理クイーン』のイメージで行きたいらしい。

「『火のない所に煙は立たず』、そして『残飯のない所にゴキはわかず』！」

そんな事、誰も言っていない。

「そういう訳だから会沢君、あなたの責任は免れないわ」

「それで…もし会沢君の責任だとして、どうするの、園子？」

蘭は怯えた顔で、園子と、生物学上でもゴキブリ科ゴキブリ目という確固たる地位を持つ昆虫を交互に見ていた。

「ま、手っ取り早い話、会沢君がゴキを退治する、かな？」

「うげ…」

「なあ、蜂、どこ行ったん？」

「もう逃げよったか？」

「いや、まだおるって！音しとるやん！」

『あつとキャッチャー後逸、ボールを見失っているー！』

「おい皆、もう蜂はええから、授業…」

「おーっ、おった、おったでえー！」

「いやーっ！！」

「おーい…授業…」

『コントロールの乱れが気になりますね。』

『ええ、ランナーに盗塁を許しかねません。』

その時、阪神カラーの侵入者は和葉の席に近づいてきた。
「ひっ！」

「ええか、払ったらあかんぞ和葉！」

「そ、そんな事言つたかて……」

羽音がはつきり聞こえてくるにつれ、和葉を寒気が襲う。

「あーっ！ もうあかんて平次ー！」

恐怖に耐え兼ねて、和葉は勢いよく平次の席へと飛びのいた。

突如、冷やかしの歓声や口笛が巻きおこるが、当事者にそれを突っ込む余裕はなかった。

「アホ、そんなにひつつくな和葉！ ……ん？」

「え、何？」

平次が迷惑そうだった表情を変え、和葉の顔をまじまじと覗きこんだ。すかさず、新たな冷やかし。

「和葉、お前……」

和葉は冷静さを取り戻すと同時に今の状況を理解し始め、顔を赤らめた。

「……香水つけとるんか？」

皆の前で言うことか、と戸惑いつつ、和葉は肯定する。

「うん……こないだ駅ん中に新しゅう出来た店で買つて……今日生まれ初めて香水つけてみてん……それがどないしたん？」

クラスメートは、前例のないアプローチの仕方を目の当たりにし、予想のつかない次の展開を見守っていた。

……と、平次が眉を寄せて口を開いた。

「アホか、お前」

「はあ？」

聞き慣れた台詞だが、今の文脈で発せられるのは心外だ。

「ええか、蜂っちゅうのはな、ヘアスプレーみたいな妙な臭いがす

るもんに寄ってくるもんなんや！ 香水なんかつけたら、そら寄ってくるわ、自業自得やで」

ああ、そう言えば今は蜂から逃げていたのだった。すっかり忘れていた。

「…けどなあ、アホとか自業自得はないやろ！ アタシだってお洒落したいんやもん！」

「はっ！ ぶっさいくな女が似合いもせん物つけて何がお洒落や！ お前に買われた香水が気の毒やのオ！」

「何やってえー！！！」

「なあ…先生、授業したいんやけど…」

その時だった。8の字運動をしていた蜂が、その軌道上に入った平次の肩にとまったのは。

「いやああああ！！！」

間髪入れず和葉から拒否された平次の体は、甲子園を舞う白球のごとく見事に吹っ飛び…

『スタンドに入ったああ！！！』

すさまじい破壊音とつめき声が教室を占拠した。

責任者ははつきりしたが未だ決着のつかない帝丹高校。

「会沢君てば！ 覚悟を決めてゴキをやっつけちゃいなさいよ！」

「んな事言ったってよお…なあ、毛利の空手で退治できねーか？ 人間のびる威力だから、ゴキブリなんかイチコロだろ」

再び話題を振られ、蘭は悲観的な顔になった。

「やだよ、素手でなんてー！」

それを見た瑛佑が、ここぞとばかりに手を挙げながら発言した。

「あのっ！！ 僕、書写の先生から新聞紙借りてきます！」

おゝ、というどよめき。

「道具が準備できたら、会沢君、お願いしますね！」

蘭にいい所を見せたいのか、クラス全体を仕切りそうな勢いだ。

「あ、やっぱり俺なんだ……」

「当然よ」

会沢の落胆を園子が一蹴した。

「じ、じゃあ、行ってきます！」

ぎこちないながらも、瑛佑は喝采を受けながら歩きだした。

…が。

「うわっ!？」

そこで、何もないのに転ぶのが彼の運命。

…そしてその先には、黒づくめのあいつが待ち受けていたりして。

…『ど根性ガエル』を思い出していたきたい。

『手を挙げて…落下点に入った、捕球体勢!』

「「ぎゃあああああ!」」

約40人分の悲鳴は、両隣のクラスの補習妨害には十分だった。

そのクラスの教師が、『やっぱりあれ以上関わってなくて正解だった』と安堵した事は、誰も知らない。

『では、アルプススタンドを呼んでみましょう…!』

『はい! こちら三塁側アルプススタンド、ブシテレビのシオジが、銀傘の下にいる人がうらやましいぞコノヤロー』の現場からお伝えします!』

人ごみは、暑苦しさを演出する。

白っぽい服の集団は眩しいし、かといって黒はそれだけで暑苦しいし、個人的に黒づくめが嫌いな小学生が約2人いる。しかし、はたまたカラフルなものもテングダケのように毒々しい…

…要するに、どないせーっちゅーねん、な八方塞がり状態である。その状況から逃避するため、人間はクーラーをフル稼働させるとか、アイスをやけ食いするとかいう対処法に頭を捻るわけだ。

しかし今、トロピカルランドの少年探偵団の行動は、計画性ナッシングの、正真正銘の子供によって決定されていた。まさに縦横無尽に。

「お化け屋敷行こうよー!!」

「さーんせーい!!」

「おい…待て…」

一応水分は採っているが、コナン、哀、そして今しがたトロツピーの帽子お買い上げの博士の3人はグロッキー寸前だ。

「工藤君、『世界中の子供達が一度に笑ったら空も笑うだろう…』っていう歌があったわよね。」

哀がハンカチで顔を仰ぎながら言った。

「それがどうした?」

「この歌、子供達の無尽蔵なエネルギーを上手く表現していると思わない?」

コナンは重い足どりのまま、乾いた笑みを浮かべた。

「…はは、なるほどな」

「どうでもいいけど、高校生とは思えない生気のなさね、あなた」

「ほっとけつての…」

「だめよ、そんなんじゃ…ほらっ、あの夕日に向かって走るのよ!」

「へ?」

元太達に追い付こうと元気よく駆け出す哀に、コナンと博士は呆然とした。

「あいつ…まさか暑さで頭がやられたんじゃ…」

『いやあ見て下さい、この坂北高校のチアガールの皆さんの若々しさ! 私の入社当初の肌のハリを思い出します!』

『…えー、シオジさん、ありがとうございました…』

「…なんなんだ、このアナウンサー…」

小五郎は、だらけながら競馬の代わりに甲子園を見ていた。蘭は登校日、コナンは遊園地で誰もいない。

そんな事はお構いなしで、真っ昼間から缶ビールをあけにかかる。
「うん、やっぱり夏は冷たいビールをきゅーっとやるに限るなーっ！」

突如、あの特有の羽音が耳についた。

「くそっ、うるせーな…蚊か！」

ビール片手にチアガールちゃん達を堪能しようと思ったのに、と、不謹慎極まりない発言。

「そこか！」

両手をパンと叩いたが、蚊もさるもの、一回では捕まらない。

「このおー!!」

…今度は、手を叩く音に続き、床に金属音が鳴り響いた。

「…あーっ!!」

…夏。

色んな意味で『あつい』季節。地球上の生物が、どこかしら羽目を外す季節。

「虫」は、秋でなくて夏の季語でもいい気がする。

「ちくしょう、この蚊め！　まだ残ってたのに!!」

甲子園のサイレンは、人が『あああ』と言っているように聞こえる。

『試合終了ー!!』

―悲鳴、歓声、蝉しぐれ…

―花火、台風、終わらぬ宿題…

『港南高校が勝ちました!』

思い出とか、後悔とかを引つくるめて、今年の夏も実に慌ただしく、
忙^{せわ}しく過ぎていった―

「オレのビールを返せええええつ!!」

―夏草や 兵どもが 夢の跡 芭蕉

おまけ

「あつという間だったな、夏…」

「宿題は済ませたのに、どうしてそんなに落ち込んでるのよ工藤君
?」

「いや…小学生のまま夏休みを過ごしてよお…なんか、時間が勿体
ない感じがしてさ」

「大丈夫よ、当分時間軸は動かないから…歳もとらないし」
「…そりゃ禁句だろ灰原」

7 コマ目：忙しい夏・後（後書き）

反省会　またしてもお久しぶりです…実写ドラマを何度も再生して
るMです。最近、別HNでブログ始めました…探さないで下さい（
笑）　これ、夏の話なのにもう冬ですね…orz　でも年内に投稿
という目標は何とか達成（笑）　ようやく携帯執筆に慣れてきたので
もっと更新頻度あげたいです…　この冬は、オリジナル小説も投稿
する予定なのでその時はよろしく願います（笑）

8 コマ目：届かない声

FBIのアジト…と言ったら聞こえが悪いので、日本支部…そんな場所がここにある、と、そう仮定しよう。

目立たない、こぢんまりとした事務所——もちろん、一定期間が経つと場所が変えられる——に、時折捜査官が立ち寄っては状況を報告したり、資料を見たりしている、と。

そして今、赤井秀一はその事務所内の2階、碧眼の同僚の部屋の前にいた。…と言っても、同僚はほぼ全員欧米人であるのだが。

「ジョディ？ ちょっと話が…」

そう言いながら、ノックが途中で止まった。

ドアノブにカードが掛けてある。

『DO NOT DISTURB』

ホテルでよくある、『起こさないでください』というやつだ。

「寝てるのか…」

ここはジョディ専用の部屋という事で、寝泊まりもできるようになっている。

まあ、今日は休日だし、1階にはちゃんと他の捜査官がいるので、問題はないし納得も行く。

「出直すか…」

踵を返して数歩進んだところで、赤井は足を止めて、僅かに眉をひそめた。

（待てよ…？）

——事務所内とはいえ、あんなに堂々と『寝ている』というアピー

ルをするものだろうか？

——それに、ジョディならば、寝ていたとしても、少しの物音——そう、今の自分の呼びかけ——にも反応してもいいはず。まして、最近の捜査が進んで、緊張感のある中だ。

——もし…もしも…

——あの札が、あの部屋からしばらく人を遠ざける為のものだったとしたら…？

——それは…つまり…もしかすると、ジョディ以外の何物かが潜んでいて、意図的にやったかもしれないという事で…

「…まさか」

そう低く呟くが早いか、赤井はドアの前に舞い戻った。

「おい、ジョディ、聞こえるか！？」

今度は遠慮なしにドアを叩く。やはり返事はない。

意を決してもどかしげにドアを引き開けた。

「ジョディ！」

——その時耳に飛び込んできたのは叫び声。

——そして目に飛び込んできたのは、冷たい銃口…

ーかと思いきやところがどっこい。

「Y i p e e e ! !」

こちらに向かつてくる、白い樹脂製の飛行物体だった。

反射的に避けると、コンマ数秒後、それは顔から右側に7センチの壁に、痛々しい音を立てて激突した。

「…」

「あー、落としちゃった…でもコントローラーはもう1個あるし」
完全なる独り言だった。

「おい、ジョディ…」

白い棒のような物を拾い上げて破損の有無を確認した後、後ろから声をかけてみたが、まだ気付いていない。

20代にしてかなりの実力、地位を持つ美貌のFBI捜査官ジョディ・スターリングは今、ヘッドフォンをしてTVの前に仁王立ちをしていた。

「あつ、敵が来た敵が！ あー！」

前方からモンスター。

「逃げて、逃げてー！」

喚きながら、手に持った物体を振り回すジョディ。どうやらそれに従い、画面の中のキャラクターは動いているようである。

「…ジョディ…」

「いやーっ、来ないでー！！！」

「…」

その叫びは、モンスターに向けられたものではあるのだが。

半ば諦め、後ろからしばしその画面を見守ってみることにした。

フィールドに点在するのは、浮遊するコイン、なぜか目の付いた星、おそらく、亀…と思われる物体、そして、実際に生えていたら間違いなく毒があるであろう派手なキノコ。

「…」

もとより感情表現が乏しい男であるから、赤井の表情はさして変化はしない。が、心中では相当の違和感と呆れが、チョコとバナナがミックスになったソフトクリームのように、いや、納豆やオクラやとろろ芋のように、はたまた、かの、ひたすらかき混ぜて食べなければならぬ怪しげなお菓子のように、ぐるぐるねばねばと渦巻いているに違いない。

そうこうしている内に、ジョディはまたしても手に持った物体を振り回しはじめた。その激しい動きに加え、文字通り手に汗握る精神状態。

遠心力に耐え切れなくなった白い棒は、再び赤井の真横をかすめ、本棚に激突。

「あっ……！」

そう短く叫んで落下点を追ったジョディの視線は、すぐ横にいる同僚をとらえた。

「え……と」

数秒間の沈黙と、思考停止。

「……」

やがて赤井は黙ったまま、最初に拾った白い物体を差し出す。ジョディは『ありがと』と小さくつぶやいて、それで何らかの操作をしたのち、改めて赤井に向き直る。

「あーびつくりしたー……シュウ、いつからいたのよ！」

ジョディはそう言いながら、空いている手でヘッドフォンを持ち上げた。

「……ちょうど、お前がキテレツな叫び声をあげた時からだ」

「うそ！ ノックした？」

「……返事がなかったから入ったんだが」

「あらそうなの、ごめんなさい」

肩をすくめ、あと数年で三十路とは思えないほど茶目っ気たっぷり

に謝るジヨデイ。

「…で、なんだコレは」

「知らない？ 今セーブしてるんだけど―これ、最近はやりの直感型ゲームなんですって！」

よくぞ聞いた、という風な満面の無邪気な笑み。…のみならず、『どう、どう？ 面白そうでしょ！』と、爛々と輝く目が訴えている。

「…ホー…」

余計な扉を開けてしまったと後悔しながらとりあえず相槌は打っておく。

「…ヘッドフォンしたままだと話しづらいわね…」

「いや、別に用件は…」

「あら、あつたから来たんじゃないの？」

「…そうだな」

「もしかして用件忘れちゃった？」

「…ああ…」

「じゃあ1階に降りてみる？ 帝丹高校の校長さんがよく言ってたわ、物忘れをした時は元いた場所に戻ればいいって」

「ああ…そうするとしよう」

「あ、ねえ待つて？ ボリユーム絞れば大丈夫よね？ 他の部屋に聞こえない程度にすれば」

「…」

興味のない赤井を引き留めておきながらテンション的には置き去りにしたまま、ジヨデイはヘッドフォンのコードを引っこ抜いた。

そうして流れたBGMは、ゲームの代名詞と言っても過言ではない、あまりにも有名な電子音だった。

「ボリユーム、どうかしら？」

「聞かれてもな…」

幾分投げやりに返す赤井。

「日本って、アーケードゲームだけじゃなくてvideo game

eも超一流なのね！」

『テレビゲーム』は和製英語であるという、元英語教師としてのこだわりが冴え渡る。そしてmessageは『メッセージ』ではなく『メッセジ』なのである。

喜々としてジョディが操作を再開した。

「こつやつて…コントローラーを動かすとその通りにキャラクターが動くのよ！」

赤い帽子に口ヒゲのメタボリック男が走り出し、例のテングダケもどきに触れて陽気な音楽とともに巨大化。

その瞬間、赤井の朧げな記憶が呼び覚まされた。

—これが噂のBダツシュか？

…と言ってるそばから、また白い棒—コントローラーが吹っ飛びそうだ。

「おいジョディ…やみくもに動かすのは止める」

さすがに至近距離で巻き添えを食いたくはない。

「その…コントローラーに付いてる紐を腕にかけておけ」

「あ、そうね。道理で何十回も飛ぶと思っ…」

「それと。前にお前がゲームセンターでやってたっていう格闘技ゲームと同じで、そんなに大きく振らなくてもキャラクターはちゃんと動くんじゃないのか」

見かねて、ジョディの手首をつかんで適当にコントローラーを動かす。太った中年男は円を描くように歩いた。

「あら、本当ね！ 私とした事が気付かなかったわ、ありがとシュウ！ ……」

ふと、ジョディは顔を上げ、頼もしい同僚を見つめた。

「…」
「…」

欧米人は往々にしてアイコンタクトが好きである、いやそんな事は

どうでもいい。

赤井は全てを察していた。長い付き合い、いわばパートナーなのだから。

分かる。間違いない。

彼女は潤んだ瞳で語っている。

『ねえ、お願いシュウ…』

『コントローラー2つあるから、対戦しましょうよ』
『断る』

約2秒後、赤井の手はジョディの手首をとくに離れ、ドアノブを回しにかかっていた。

8 コマ目：届かない声（後書き）

反省会 もうこの後書きは「作者より」なんて偉そうな事言っただけで「反省会」と呼ぶのが適切ですね or z↑最近この絵文字を多用します、更新するたびお久しぶりなMであります。カメの歩みで本当にすみません。今回の話は、「しばらくゲーマーなジョディ先生を見てないなー」と思って書いてみました。たまにはFBI捜査官も息抜きするかな、なんて。タイトルは…あまりしゃれたのは思いつかなくてこじつけたというか。この2人は日常会話が噛み合うのか否か、みたいな（笑）時間軸としては、ジョディ退院〜キール登場の間、一段落したひと時と思っていただければ。そう言えば、以前ドラマを題材に書こうかな、なんて言っていました、うまくいかなかったのでボツにしました、という報告（笑） 更新頻度上げるよう努力します…今回は「介入」の後書きで、できれば1ヶ月以内にお会いしましょう（笑）では。

9 コマ目：つたない手料理

その門戸は、とつくに見慣れた風景のはずだけれど。

「ごめんくださいーい、和葉ですー」

やや緊張した面持ちで、和葉は服部家の呼び鈴を鳴らした。

「ふー…」

はやる気持ちを押さえようと一つ息をつき、爪先や踵を上下させながら、左右のーどこまで行ったら尽きるのか分からないほど長いー白壁の塀をかわるがわる見ていた。

「お待たせ、和葉ちゃん！ さ、入り！」

につこりと微笑み客を招き入れる静華の、引き戸を開ける所作にさえ漂う気品。彼女は見習うべき女性だ、と和葉にあらためて感じさせた。

「おじゃまします」

「平次ー、和葉ちゃんやでー！ そろそろお待ちかねの夕飯や」

家の廊下を歩きながら、2階の方に向かって声をあげる。間もなく階段を下りる音がして、平次が出てきた。

「まったく、毎週毎週よう飽きずにやっとなるなあ」

最近、毎週金曜の夕方になると、和葉は平次の家に上がりこんでいた。平次に手料理を作るためだ。

『も、もうすぐ平次の誕生日やし、その時に美味しい料理作れたらええな、って思ったんや…それで、練習しようと思って…』

との和葉の計画に、静華は快く賛同した。

『大歓迎や！ せやな、内緒で平次本人を練習台にしたらええ。まあ、和葉ちゃんの料理の腕はもともとええけど、作ってる内に平次の好みの味とか分かるかも知れへんし…』

静華はにつこり笑って和葉をひじで小突いた。

『それに、いずれは誕生日の時だけといわず、毎日作る事になるかもしれないしな』』

そう言われた和葉は顔を赤らめた。

『な、何言うてんのオバチャン…!』

「…何やの、毎週毎週来たら迷惑？」

「ま、期待せんと待つてるで」

「ふーん、アタシの料理はどーせ『イマイチ』やて言いたいんやろ。今に上手くなつたるから、覚悟しとき！」

すねた顔でそう宣戦布告した後、和葉は両手で拳を作り、

「よっし！」

と気合いを入れた。

台所に向かう和葉をその場から見送った静華は、平次に愚痴り始めた。

「随分ぶつきらぼうやないの。せつかく来てくれとるんやからもう少し喜んだら…」

「頼んでもないのに和葉が勝手に来よるんやんけ。何のつもりか知らんけどなア」

「…人の厚意にわざわざ理由つけなアカンの？」

さすがにその理由を今言う訳にはいかない。

「まあええ…それと、料理の評価も厳しいんとちゃう？ もっと褒めてもええ出来やと思うけど…」

「いつも食べとるオカンの料理がうますぎるからや…って言うてもか？」

「…な、何や。おだてたかてアカンよ…ほ、ほほほ…」

そう言いながら静華の顔は締まりなく笑っている。

「…アホくさ…」

その一言で一蹴し、母親を横目に平次は自室へ戻っていく。

「あ、こら平次！ …… まったく……」

ふと静華は、こっそり平次の様子を伺ってみる事を思いついた。忍び足で階段を上り、平次の部屋のドアをほんの少し開けようとしたが、その必要はなかったようだ。

「―おい、聞いたるんか、工藤？」

携帯電話で会話中だったのだ。話し相手の声は聞こえなかったが、どうやら、あの『工藤新一』のことらしい。

まだ直接会った事はないが、平次の話にはしょっちゅう出てくる。どこか知らない所で事件の解決に忙しいと聞いたが、今もこうして電話をしあうとは、よっぽど気が合う友達なのか。

―東京の毛利探偵事務所―

…コナンの部屋の中。

「聞いてるよ、ちゃんと…毎週金曜日は和葉ちゃんが家に来てるってんだろ？」

『ほんでや、手料理が食えるんやで！ ま、味はぼちぼちって所やな。どーや、うらやましいやろー！』

「…」

平次の部屋の外で静華は吹き出しそうになるのを堪えていた。

（なんや、めっちゃ嬉しがつとるやないの…自慢までして）

静華はにやにやと笑いながら、音を立てないよう台所へ降りていった。

ただの自慢話では終わらなかった。

『…はっ』

数秒の沈黙の後の、一蹴するようなコナンの笑いに平次は憤った。

「なんや、その物言いは」

『忘れてねーか、オレは毎日蘭の手料理食べてるぞ』

「…！」

しまった。負けた。

ばたつと机に突つ伏した平次に、数秒経ってから『おーい…？』と声が掛けられ、それからさらに待つ事数秒。

「いや待てえー！」

生き返った。

「毎日作ってもらってる言うても、それは『工藤』のための料理やないやろ？」

『あ？』

「『お子ちゃま』の『コナン君』向けっちゅうことや。まあ、ねーちゃんに感謝はするべきやで、例えその料理がクリームたつぷりのケーキや日の丸刺さった『お・こ・さ・ま』ランチやったとしてもな！」

『…ニヤロ…』

今、会話を繰り広げる2人は、もはや探偵という肩書など感じさせない、ただの高校生と化していた。

台所。メニューは何にしようか、と静華が問いかけたところ、和葉はため息をついた。

「ほんま、何にしたらええんやろ…こないだは、あんまり上手く出来んかったし…」

言うなれば、スランプである。色々とパーティーに出るような洋食に挑戦しているものの、どうも慣れない。

だから、平次の反応がかんばしくなかったのも仕方ないとは言えるが。

「…なあ和葉ちゃん、今日は凝った料理やのーで、自分の得意なものにしたらどうやろ？」

「え？」

「横文字ばっかの料理なんて、出来ひんでも気にする事ないねん！
例えばあの…どこかのジャズ歌手みたいな名前の…ルイ・アーム
ストロング？」

「それ…ひよつとして、ビーフストロガノフ？」

「あー、せやね…とにかく私が言いたいのは、これからは家庭料理、
おふくろの味の時代や、って事！」

「…『これからは』？」

時代に関わらず、昔から慣れ親しんだ味だから『おふくろの味』と
いうのだが。

論調はともかく、静華は、そのような料理に立ち返る事で和葉に
自信を取り戻してもらおうと考えたのである。元々、腕はあるのだ
から。

「ちようど材料が揃つとるからカレーなんてどうやる。味付けはも
ちろん任せるわ」

「…はい！」

和葉の表情が明るくなったのを見て、静華は『その意気や』と満足
気に頷いた。

数十分後。二人の前には出来立ての料理が並んでいた。

「ほんまに上出来やないの和葉ちゃん！これなら平次も文句言わ
れへんなア！」

和葉はまんざらでもない表情で『ありがとオ』と照れながら呟いた。

「ほな、持っていこか」

静華は皿をお盆に乗せて食卓へ運ぼうとした。

…が。

タコ焼きプレートを落として足の指を折るという前科のある彼女
に手料理を託すべきではなかった。

「「……あ————！！」」

その十数分後、料理をお盆に乗せた和葉が、こわばった表情で廊下を進んでいた。

そつと茶の間の障子を開けると、平次は既に食卓についている。彼が自分に気付いて顔を向けてきたので、和葉は陰鬱なため息が出そつになるのをすんでの所で抑えた。

「お、お待たせ平次！ 出来たで……」

ぎこちない顔と声と足取りで食卓へと歩み寄る。

「待ちくたびれて死ぬか思ってたで！」

「さ、さよけ……！」

得意のはずのツツコミにもいつもの覇気がない。

「で、今日は何作ったんや？」

「……何やと思う？」

「またあのニール・アームストロングとか言うけつたいな料理とちやうやるな」

ネタ合わせでもしたのかおのれらは。

「……ビ・ー・フ・ス・ト・ロ・ガ・ノ・フ」

そう答えながら、『親子やな……』と和葉は頭の隅で考えていた。

ちなみにニール・アームストロングは『人類にとっては大きな一歩だ』との格言を残した宇宙飛行士である。

「ま、どっちでもええわ」

「よくないやろ……」

「ほんまに腹減ってるんやから、はよ食べさせてくれんか？」

「え、ええよ……はい、どうぞ……」

恐る恐るテーブルの上に置く。

「……なんや、さっきから様子がおかしいで？」

「へっ！？ そうやるか？」

（ああ、平次は探偵やから分かってしまっやろか…）

「…変なモン入れたんとちゃうやろな」

と言つて、平次は皿の中を覗き込む。

「そ、そんな変なもんなんて入れてへん！ 入れてへんもん！」

大慌てで首と手を一生懸命振る。

ちよつと後ろを振り返ると、静華が物陰から心配そうに見守っているのが見えた。

「ま、とにかく食べてみよか」

そう言つて料理に手を伸ばした平次を見ながら、和葉は小さくため息をついた。

（ああ、ごめんな平次…変なもんは入つてへん、入つてへんけど…）

静華は、先程からずっと物陰で、

「ごめん、ホンマに堪忍な、和葉ちゃん…」

と呟いていた。

そつと振り返り、その謝罪を読みとつた和葉は、

（いいんです、気にせんといってください…）

と、力なく目で言っていた。

平次は料理にいくらか口をつけた後、手を止めた。

「…和葉」

「はっ、はい!？」

和葉は縮み上がつて、急いで向き直る。

「…なんやその反応、やっぱ怪しいなあ…隠し事してるんとちゃうんか？」

「そ、そんな事あらへんもん！…それで、どうしたん？」

「ああ…和葉…お前…」

「…な、何…？」

和葉と静華は息を呑んだ。

「腕上げたなア！」

「…は？」

「ホンマ、いつもの数倍うまい！　どこで修行してきたんや！？」
「…」

「隠してもあかんで！　えらい練習してきたんやろ、きつと！」

「…」

「あ、それとも隠し味でも入れたんか？」

「……っ！…！」

うつむいてた和葉の、手が、動いた。

「…ボケエエーーーーっ!!!!!!」

和葉がつかんだ、料理の入った皿は…

パイ投げの要領で…

平次の顔へ、GO。

「ぶっ!?!」

本来なら『何さらすんじゃボケ!』とすかさずツツコミを入れて問いただすところだが、今の平次にはそれでもできなければ、和葉がどんな顔をしているかなんて分かるはずもなかった。

顔に皿が張り付いているのだから。

「うわぁぁん! 平次のドアホーッ!」

和葉は泣き叫んで部屋を出て行った。

「お、おい和葉!?!」

顔に張り付いていた皿が、ゴトツと音を立ててテーブルに落ちた。

引き戸をぴしゃりと閉める音を遠くに聞いた後、物陰で見ていた静華は、平次のもとへゆっくり歩いていき、肩をぽんと叩いた。

「…あかん、今のはあかんわ平次…」

「な、なんでや！？　今までキツイ事言っただから、今日ぐらい無条件で褒めたるかなって…」

「無条件にも程があるわ！　和葉ちゃんの愛のこもった料理と、インスタントの区別がつかんようじゃ、あかんて言ってんねや…」

「え？」

静華は大きなため息を一つついた。

「私が料理ぶちまけてしもたからな、裏口からスーパーに惣菜買いに行ったんや…」

「はあ！？　それ先に言わんかい！」

「まあ…出来合いやって言うたら怒られるかなーと思ってっつやむやのまま出してしもった部分はある」

「おいおいおい…」

「けど、それを全く気付かんで『うまい』っちゅうなんて、さすがの私も予想GUYやで」

「ちょお待て、もっと褒める言っただんはオカンやんけ！」

「それはともかくな…」

「聞けや！」

「和葉ちゃんはがっかりしてるやろうな…『アタシの愛はインスタントに負けたんか』って…」

「な、なんやそれ…」

「ちゃんと和葉ちゃんに謝るとき！　電話するか、直接会いに行くかして」

「あ、ああ…」

静華は、平次の顔を見て、もう一度ため息をついた。

「…とりあえず、そのレトルトカレーを落とそか？」

洗面所に連れていくため平次を廊下に押しやった直後、玄関でドサリと音がした。

「あら…お帰りなさい」

「静…これは…何事や」

震える手で、褐色に加え緑黄色野菜で彩られた平次の顔を指す平蔵の傍らには鞆が落ちていた。

「えー…話すと長いんやけど。とりあえず先に洗うで平次」

「……」

数分後、平次は自室で再び携帯電話で話していた。

「ちゃんと謝つとるやろか…」

例によってドアの隙間から様子を伺う静華。息子の会話の盗み聞きに全力を注ぐ42歳。

「…例えばな、姉ちゃんの手料理と冷凍食品間違えてもたら、お前はどうすんねん工藤？」

「…はあ？」

「ほんで皿をパイ投げみたいにやなァ、ゴハッ！」

「電話する相手が違うやろボケエ!!」

静華が部屋に飛び込むが早いのか、お盆によると思われる激烈なツツコミの音が、寝屋川の大邸宅にこだました。

9 コマ目：つたない手料理（後書き）

反省会　今回はわりと前から考えていた話で、前回よりは短い間隔で投稿できたかなと思います。相変わらず『長期更新停止中』と表示されますがorz　服部家みたいな日本家屋では食事する部屋をなんて言うんだろう（ダイニングじゃないですよ…）と思って、とりあえず茶の間と書いておきました…普段私は標準語でないの（東か西かといえば西）、大阪弁は結構楽しんで書きました。自分のとこの方言が混ざってないか心配ですが（笑）　平次と和葉の仲は親公認なので（笑）、こっそり花嫁修行をしたりしてるかなーなんて思いながら書きました。そして平次はどこまでも鈍いという（笑）きつとオカンが言った『愛のこもった』『アタシの愛は』云々は、平次にはピンと来てないと思うのです（笑）　今の所、コナンキャラで誕生日の話が出ているのは新一と博士だけです、これから先、原作もしくは映画で誰かの誕生日が取り上げられたりするんでしょうか。ちょっと楽しみです（＾・＾）

10コマ目：飽きない面白い物ゝ足りない人（前書き）

今回（10話）はギャグ…じゃないです。ほのぼの、しみみり、という感じ。

10コマ目：飽きない買い物、足りない人

「どうして女の買い物は長いんだ？」

―とは、小五郎の言葉だったか。

米花デパート。

蘭と園子がショッピングに来ていた。ここは洋服売り場。

「あーんもう、どれにすればいいの？ 園子、迷っちゃうー！」

「京極さんに送るのよね？」

「そう！ 誕生日に、素敵な服を贈るのよ！」

「念のために聞くけど、今回は謎めいたメール送ったりなんかしてないわよね？」

園子はふふつと笑って頷いた。

「ええ、今回は妙な駆け引きはナシ！ ストレートに、そして、予告なしでサプライズ！」

鼻歌を歌いながら、次から次へと見て歩いていたが、ふと立ち止まって、ある服に手をかけた。

「ねえ、これなんかどう、蘭？」

園子が持つハンガーにかかっていたのは、青っぽい色をしたジャケット。

「そうねー…オシャレだけど、京極さんって、こういうの着るかなあ？」

腕組みをして考えている蘭に、園子にはっこりと笑いかけた。

「ふっふっふ、これは真さんじゃなくて、あんたのダンナに似合うって言ってるのよ！」

園子からの思いがけない奇襲に、蘭はぎょつとして顔を赤らめた。

「な、何言ってるの！？ 誰が、新一なんかに…！ …あ。ちょっとあそこ見て園子！」

「ごまかさないでよ蘭！」

「違うわよ、本当に見てよ…あのゲームコーナー！」

「え？ …あーらら」

2人は顔を見合わせると、真っ直ぐ、見覚えのある人影に向かって歩き出した。

ドライブゲームの周りでは、何人かが取り巻きのようになら集まって様子を伺っていた。

「すげー…見た事ねーやこんな動き…」

などといった呟きが聞こえる。

間もなくハイスコアが叩き出され、取り巻きは一人二人とその場を後にしてゆくところだった。数秒間画面を静かに見届け、ゆつくりと席を立てて背筋を伸ばす碧眼の女性の背後から、懐かしい声が飛んだ。

「ジョディ先生！」

彼女は、ぱつと振り向き、直後、驚きと喜びを同時に顔に出した。

「毛利さん、鈴木さん！」

「お久しぶりです！」

「奇遇ね…また会えるなんてうれしいわ」

ジョディは感嘆のため息をついた。

「本当ね！ でもアメリカの仕事はどうしたの先生？」

「なんだか日本語もお上手になりましたよね？」

「そ、そうかしら？」

2人の問いに、苦笑いしながら無理矢理語尾を片言にするジョディ。

「日本がすごく気に入ったし…勉強の成果が出たのかしら？」

との言い訳に、蘭は無邪気に頷いた。

「えっと…仕事…は、また休暇を貰ってね。」

どもりながら言葉が続けると、園子はしたり顔で笑った。

「で、大好きなアーケードゲームをしに来た、って訳ね」

「そう、そうなのよ！ ストレス溜まっちゃって！」

「ストレスって…仕事で？」

気分転換にしに来たのは嘘ではないが、色々と突っ込まれては苦笑するしかない。

「そうね…この間同僚に『お前にはドライブテクもない』とか言われて気に障ったり…」

「あ、それでドライブゲームね」

園子は勝手に納得してくれているようなので助かった。

そこまで喋った所で、ふと体の中を空っ風が通り抜けるような感覚に襲われた。

「…でも…」

紅を引いた口から本音がついて出る。

「やっぱり、ダメね。」

「先生…？」

ジヨディは2人から目をそらし、何も無いところを見るともなしに見ている。

「憂さ晴らしのつもりが、嫌なこと思い出しちゃうみたい…チヨイスが悪かったのかしら？」

シューティングに、ドライブゲーム。

銃と、車。

――来葉峠に響いたであろう銃声と、燃えたシボレー。

きょとんとする園子を視界に捉えたジヨディは、あわててとりなした。

「あ、気にしないで！ こっちの話だから…」

「大切な人、だったんですね」

「え？」

作り笑いは、あっという間に剥がれ落ちた。

園子の横で、蘭はジョディの顔を見据えていた。潤んだ目で。

「…分かる…の？」

呆然とした顔のまま、たまらずジョディはぼつりと問うた。

「分かりません。でも、分かります」

自分の目から涙が溢れた事に気付き、蘭は手でそれをぬぐう。

「勝手な事言つてすみません。でも、何だか同じような気がしたんです、私と」

「蘭…」

園子は涙をぬぐって微笑む親友の姿を、ただ見つめていた。

この短い会話には、固有名詞も、具体的な単語もない。だけど、園子にも、蘭の言いたいことは『分かる』気がした。

―やっぱり、時々さみしいんだ。

―ふとしたことが、あの人の不在を突きつけてくる。

園子は、はつとしてジョディに向き直った。青い瞳が一瞬、揺らいだように見えた。

「―ありがとう、毛利さん」

彼女も、蘭と同じように微笑んだ。『私は、泣いたら化粧が落ちちゃう』と笑い飛ばして。

「あ…そろそろ時間みたい。野暮用が入ってて」

「じゃあ先生！ 今度、またパ―ツとお茶しようよ」

園子の提案に、ジョディは『いいわね』と快諾した。

「じゃあ、また会いましょ」

「はい、先生もお元気で」

ほんの短い言葉しか交わしていないのに、ずっと深い会話をした、そんな気がした。

背中合わせに歩いていく途中で、園子が振り返った。

「…先生！」

とびっきりの、元気な声。

「なに？」

ジヨデイが振り向いたのを確認すると、園子は腕をめいっぱい突き出して親指を立てた。

「ガンバ！」

眉を大げさに上げて驚いてみせた後、ジヨデイは微笑み返した。

「Thanks！」

それが、短い付き合いだった自分とも真っ直ぐ向き合ってくれた、かつての教え子へのはなむけの言葉。再び歩き出しながら、ひらひらと手を振った。

園子は満足げに歯を見せてにかつと笑った。くるりと回って、待っていた蘭のもとに駆け寄る。

「ねえ園子」

2人は、また歩き出した。

「ん？」

「なんか、今のかつこよかったよ。」

その言葉に対し、照れ隠しなのか何なのか、また大げさな笑顔を作った園子。

「ぶあーか！ なーに言ってんのよ！」

蘭の背中をばしんと叩き、その勢いで腕も組む。

「よし、今日はこの園子様がジューズでもアイスでもおこっちゃ

うゾ！」

「どうしたのよ急に？」

「あんたが人間として魅力的すぎんのよ！」

「なーにそれー…」

笑いながらも、蘭の目は、まだ潤んでいた。

笑おう。

わたしが蘭にできることは、これくらい。

「お？」

少しして、園子がすっとんきょうな声をあげた。『偶然が続くわね』と。

視線の先には、可愛らしい―ある人は『憎たらしい』と言う―子供達4人。

コナンの同級生、少年探偵団だった。

「あら！ 皆どうしたの？」

蘭がいつもの愛想のよさで近寄っていく。

「あ、蘭お姉さん！」

ぶんぶんと手を振る歩美とは対照的に、哀はいたって冷静に質問に回答する。

「今度のキャンプのための買い出しよ…」

「腹が減っては戦はできぬっていうしな！」

「元太君、食べ物だけじゃなくて他にもいろいろ買うんですよ！」

「まー、ガキンちょがいつちよ前に諺なんか使っちゃって！…で、博士とメガネのガキンちょは？」

元太をからかった後園子が尋ねると、哀は肩をすくめてみせ、歩美が質問に答えた。

「うーん、博士は風邪ひいちゃったから、今日はお留守番なの！
コナン君は看病してあげてるところだよ。」

「そうなの！ みんなだけでおつかいななんて偉いわね。」

保母さんに向いているかもしれないと園子に思わせるほどの、優しい微笑み。新一の敵が減らないわけだ、とも思う。光彦が『恐縮です』などという中、子供達は嬉しそうに胸を張った。

「んじゃまあ、おつかい頑張りなさいよ！ 行こ、蘭！」

「うん。みんな、またね。」

「「はーい！」」

「なー灰原、早く食いモン買いにいこーぜー……」

「待ちなさいよ、他が先……」

哀が突然歩みを止め、思案顔になった。

「どうかしましたか、灰原さん？」

「いいえ、別に……」

思い起こしていたのは、ばったりと出会った直後の、蘭の表情。

哀は不意にポケットから携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

「ちよっと、江戸川君に他に買う物がないか確認してみるわ。」

文面は手短にすませ、送信。そして、まもなく返ってきた返事も短かった。

『わかった』

哀は後方を見回し、2人の姿を探した。

――いた。

だいぶ小さくなっていた影に目を凝らす。

ロングヘアーの彼女は携帯で話している。その、表情は――

――ああ、よかった。

「哀ちゃん、コナン君なんて書いてた？」

「特に他にはいらないそうよ」

「じゃあ早く行こうぜ！」

「慌てないの！」

元太をいなして、携帯をしまう。

再び歩き出しながら、哀は思った。『私、何やってるのかしら』と。

―この行動は、日頃思う事と矛盾しているのかもしれない。

―だけど、彼女の泣き顔を見たくないというのは、私にも言える事。

「これで、いいのよね」

ぽつりと、呟いた。

「うん、そうだね！ 後買うのは乾電池と―…」

「食べ物だな！」

「何度言えば気がすむんですか元太君！」

噛み合ったのか否かよく分からない会話にたまらず吹き出し、くすくすと微笑む。

「ええ、次に行きましょう」

「「おう！！」「」

3人は握り拳を高々と突き上げた。

10コマ目：飽きない買い物足りない人（後書き）

反省会　今回は他の話と雰囲気が違う感じになりました。58〜59巻の件を受けて、「届かない声」と今回が分岐した感じでした。蘭の言葉も哀のメールもあまり具体的には書きませんでした。何となく分かる」、そんな感じで雰囲気が出せていれば幸いです。お買い物シリーズは3部作となっていますが、また次回からはギャグです。只今2番目の話のオチをどうやって強くするか考え中です…

11 コマ目：飽きない買物／食えない男（前書き）

前話を飛ばした方のために状況説明。少年探偵団はキャンプの買い出し中ですが、博士は風邪のため、コナンはその博士の見舞いのために阿笠邸で留守番です。

11 コマ目：飽きない買い物、食えない男

『よい子の皆さん！　ここでは、遊ばないようにしましょうね…』
よい子は最初から悪い事をしないのであって、よい子に注意したところの意味がない、というのはよく聞く話だ。

それはさておき、米花デパートの少年探偵団はエスカレーターで1階へと向かっていた。

「じゃあ…次は食材を買おうかしら。」

「その前に本屋行こうぜ！」

その元太の言葉を聞いた途端、光彦が怪訝な表情をした。

「食べ物が欲しいって言ったのは元太君じゃないですか！」

「へへ、読みたい漫画あるの忘れてた。」

哀はポケットから携帯電話を取り出し、サブディスプレイを確認める。

「…いいわよ別に。まだ時間は遅くはないし」

そう言って、つい、と左足を前に出した。

1階のフロアに降り立つが早いか、元太はまっすぐ本屋へと向かっていく。自分が元太の保護者役だと言わんばかりに光彦がすぐ後に続いた。

歩美も駆け出そうとしたが、右手に宝石・アクセサリー売り場を見つけ、足が止まった。男子二人は構わず進んでいく。

哀がゆっくりと追い付いた時、歩美は目を輝かせて慌ただしく手招きをした。

「ねえ、見て哀ちゃん！」

ショーケースを覗くと、一面、宝石。ネックレス、指輪、イヤリング。強い照明に照らされ、一層眩しく、虹色に輝いていた。

「きれいだねー…」

「…そうね…」

歩美は額をぶつけてしまいそうな程ケースに顔を近付けていた。ガ

ラスが曇ってしまい、その度ほんの少し移動して飽きずに眺めている。

「歩美もいつか大人のお姉さんみたいに、こんなの着けてみたいな！」

初々しさと背伸びとが同居する笑顔に、哀もつられて微笑んだ。

「おい、歩美ー！」

「灰原さーん！」

「こっち来ねーのかー？」

見れば、元太と光彦が大きく手を振って自分達を呼んでいる。

「いーまー行ーくー！」

両手をメガホンにして元気よく返事する歩美。振り返って問う。

「哀ちゃんは？」

「もう少し見てるわ。すぐ行くから」

大きく頷き、ぱたぱたとスカートの裾を揺らし駆けていく背中。

後ろ手を組んだまま、ショーケースに向き直った。

思えば、以前はこんな気楽な買い物は出来なかった。

——もし…『普通』の生活を送っていたなら、もっと、こんなたわいない、『普通』の事をして過ごせたのかしら。

並んでショーウィンドーを眺める光景を想像する。

——例えば、お姉ちゃんと。

「気に入った宝石はあった？」

突然頭上から声が降ってきた。見上げると、店員らしい若い女性がショーケースに肘をついて笑いかけていた。

「お嬢ちゃん、一人でおつかいに来てるの？偉いわねえ」

「…友達と一緒に来てるのよ」

哀はあえてぶっきらぼうに答えた。まさか子供相手に売りつけたり

はしないだろうが、話が長引くと面倒臭い。

「あらー、そうなの！」

この手の店員がよくやるオーバーリアクション。

「ええ……」

足を半歩引いて、あさつての方向を向いた。その店員の返事は待たずに立ち去るつもりだった。

その瞬間、背後の空気が変わった。

「……では、貴女の友人の『探偵君』もご一緒で？」

聞き覚えのある男の声だった。

「！？」

振り返ると、そこにいたのは先ほどと同じ女性店員だった。ただ、雰囲気明らかに違う。

「再びお目にかかれて光栄です……」

哀は目を見開いた。

「あ、あなた……」

その人物はにつこりと微笑むと、ポケットから『それ』を取り出して右目に掛けた。

「これでお分かりになるでしょうか？」

そう、あの独特の片眼鏡を。

（キッド……！？）

哀は数秒間呆気にとられていたが、咄嗟に周りの様子を伺った。客は右へ左へ素通りしていく。もし彼らがこの奇妙な店員の存在に気付いたら大混乱になるだろうと思いつながら哀はその光景を見つめていた。

そんな事は気に留めず、女性店員……改め怪盗キッドは、ショーケ

「スに肘をついたまま身を乗り出し話しかけてきた。

「さて、よろしければ先ほどの質問に答えて下さいますか？」

「え？」

「あの『探偵君』もこの米花デパートに来ているのかどうか、ですよ」

逡巡。

「…今ごろ、この1階の書籍売り場で推理小説を探しているんじゃないかしら？」

とつさに思いついた嘘だった。牽制しておいたほうがいい、と、直感的にそう思ったのだ。

「私が連絡すれば、食いついてくるでしょうね。彼も、警察も」

そう言つて、ポケットから出した携帯をちらつかせた。ただ、その程度で動じる相手ではないということも、分かつてはいたのだが。

「もちろん、その場合は捕まる前にここから抜け出すまでです」

キッドは自分の長髪―かつらだろうが―を指に巻きつけていじっていた。

「…でしょうね」

哀はふつと笑みを浮かべた。

「今度はこつちに質問させて頂戴…どうしてこんな所にいるの？」

「おや、ご存じありませんか？ 1ヵ月後、このデパートのイベント会場で巨大宝石店が開かれるもので…下見ですよ」

「ふうん？ 1ヶ月後にはまたあなたの予告が紙上を飾るってわけね」

キッドは手で銃のような形を作ってみせ、『ビンゴ』と微笑んだ。

「で、こうして周りにひしめいている宝石には目もくれないのね」

「ええ、まあ」

曖昧な返事だったが、その表情は全く崩れない。もう少し突っ込んだ質問を試みたくなった。

「現在、ビッグジュエルとかいう巨大な宝石ばかりを狙っているのは何か理由があるの？」

一拍あけて、

「残念ながら企業秘密でして」

という返事が返ってくると、哀は『そりゃそうよね』と苦笑した。
「…しかしながら」

逆接。

「ながら？」

哀は上目遣いで次の言葉を待った。

「もし貴女がお望みならば、どんな宝石でも喜んで差し上げます」
微笑む男。

「盗品がプレゼントなんてごめんだわ」

突っぱねる女。

「それは残念ですね…では」

小さく煙幕が上がり、赤い花が現れた。

「こちらでいかがでしょうか？ よくお似合いですよ」

差し出された花をつまみ上げ、観察してから哀は言い放った。

「盗品は結構って言ったでしょ」

余裕の笑みで突き返す。

「これ、そのエレベーターの所にある造花よね？」

「…」

心持ち、モノクルがずり落ちたような気がしなくもない。

「私をおちよくってるの？ プレゼントくらいで心は動かされない
つもりよ」

—くらいじゃ、ね。

銀杏柄の財布が入ったショルダーバッグに触れて内心ほくそ笑んだ。

「田村さあん！ ちょっと！」

奥から中年女性の声。

「は、はい店長！ ただいま！」

モノクルを外し、慌てて甲高い声で振り返るキッド。あらためて見ると胸元には偽名だろうが『田村』と名札。作りのしよぼさから見て非正規雇用だ。

「…下見とか言ってるけど…あなたお得意の特殊メイクも費用がかかるから実際にバイトしてるのね…女装までして」

哀れむように、そして最後の一言をやや訝しげに言うと、キッドは向こうを見つめたままぼそぼそ愚痴りはじめた。

「時給が良かったから仕方なく…あ、じゃなくて」

我に返り中断するが、もう全て喋ってしまったも同然だ。

「…大胆不敵だけど華麗じゃないわ。ファンが見たら泣くわよ」

淡々と科学者よろしく考察。

「あ、いや…」

また哀に向き直り弁解しようとする。『私がここに来たのは貴女に逢うためです』とでも言いたいのか。知ったこっちゃない。

「あ、そうだ…女性の格好で素の声出してたあなた…最っ高にキモかったわ。」

「…！」

ガクリというのは効果音が顎の外れる音か。

「じゃあね」

言いたい放題言ってさっさとその場を後にする。

しばらく行ってほんの少し振り返る。店員はショーケースにだらしなく突っ伏し、先程のおばさんから『田村さん！』と叱られていた。

—ポーカーフェイスも形無しね。

他人事のように呟き、3人の待つ本屋へと向かった。

ちなみに、どうしてこのようにキッドをけちよんけちよんにしたのかと言えば、感傷に浸っていたのを邪魔されたからだったりする。「これだからやたらちよつかいを出してくる店員は嫌なのよ」

元太達はやはりというか何というか、漫画雑誌を立ち読みしている。

それを横目に、料理本コーナーを物色しに行く事にした。3人を連れて食品売り場に行くのはその後だ。

書架を順番に見ていると、一番端に窮屈に入れられている本が一つ。

『実験の神ガリガリ先生の楽しい化学クッキング』

怪しすぎる。

真っ黒な外装である時点ですでおかしい。『料理に彩りは大切よ』と哀は心の中でつつこんでいた。

サブタイトルは『ゝあなたの家族も実験台ゝ』だ。

なぜこんなキワモノをここに置いているのか皆目見当がつかない。

だが…

個人的には、非常に、そそられる。

手を伸ばしかけたが、別の客―中年男性―が近付いてきたので慌てて身を隠す。何て馬鹿な事を、と哀は我に返り自分を叱った。あれは7歳児が持つていてはならない。『7歳』というのが見た目だけだとしてもだ。

男性が去って間もなく、今度はハイヒールの音を響かせ女性が料理本コーナーにやってきた。

「おかしいわね、さっき通った時はあつたのに…」

書架をしばらく見回した後、残念そうに手ぶらでその場を後にした。すぐに哀がそこに舞い戻ると、無くなっていたのは例の黒い本だった。

哀は女性の風貌を思い起こし、やがて身震いした。

鋭い目、眼鏡、アップにした茶髪。

妃英理弁護士だ。

…危ない所だった。

あの本は自分が持っていてもらえないが、彼女はもっといけない。コナンによれば妃女史の料理は殺人級、別居の原因になった程だという。

そんな彼女が『ガリガリ先生』とやらとコラボレートしようものなら、本当に死人が出たに違いない。

哀は先に本を買っていった見知らぬおじさんに感謝しながら胸を撫で下ろした。

…『見知らぬ』？

いや、違う。喋った事はないが、確かどこかで一度だけ…

次の瞬間、脳裏で、あの男性の顔と、別の服装の残像とがジグソーパズルのようにぴたりと合致した。

「…そんな！ 彼が、どうして…」

哀は凍りつき、絶望感に襲われた。

「…マスター…」

もう、『ポアロ』には行けない。

11 コマ目：飽きない買い物 食えない男（後書き）

反省会 進行状況は上々です。ただ今回は内容に自分で不安があったというか、ギャグに戻すと宣言したわりにオチが弱いなと思ったので、構想してた話に尾ひれを付けて悪あがきしました（苦笑）

「田村さん」「ガリガリ先生」っていうのは一応某推理ドラマ二つを意識したつもりです。…正直偽名は悩みました。「佐藤」とか「鈴木」とか「山田」とか「田中」とかいうポピュラーな名前はもう既出ですから、無理矢理…（苦笑） 2話目が終了したお買い物シリーズ3部作、最後となる次回もどうぞお付き合いください（^-^）

12コマ目：飽きない買い物、情けない女（前書き）

色々とし、「何か」壊れているので覚悟の上お進みください。

12コマ目：飽きない買い物、情けない女

哀はややげんなりしながら、漫画を立ち読みしていた元太、光彦、歩美を食品売り場へと促した。

ああ、このいたいたいけな子供達は、先程哀が目撃した衝撃の事実を知るよしもないのだ。…いや、後で知らせておかなければならない。哀はそう決意した。

惣菜売り場を通り抜けながら、

「メニューは何にしましょうか？」

と問う光彦。

「うな重はだめか？」

「えー…難しそうだよ。」

というやり取りはもはやお約束だ。

「…無難にカレーでいいんじゃない？」

そう言いながら哀は肉のパックを手にとった。

「あ、いいですねー。」

「色んな物が入られてお得だしな！」

「…何でも入るのも困りものだけど…バーベキューの方が中身が分かってるからいいのかしら…」

カートに肉を入れる手を止め、ぶつぶつ呟く哀の顔を歩美が覗き込む。

「哀ちゃん、何の事？」

「…今ちよつと、食の安全について考えてるのよ」

「さ、さすが灰原さんです！」

「どっちみち野菜がいるだろ。オレ取ってくる！」

「あら、助かるわね」

「競走だあ！」

ドデドデという効果音があまりに似合うランニングフォームだ。

「走らないで下さい元太君！」
「歩美も行くー！」

慌ただしく突き当たりを左手に曲がる3人を、微笑ましいと思いながら見送った哀であつたが。

15秒と経たないうちに元太達は駆け戻ってきた。
何事だ。

恐怖で一変したその表情は、まさにビフォーアフターで比べたくなるほど。可哀相な事に、若干寿命が縮んでしまったのではないかと思われる。

「…どうしたの？」

肩で息をする子供達が落ち着くのを待つて、哀は尋ねた。

「あ、あのね…今、野菜売り場に…」

身を震わせながら、3人は必死で状況を説明する。

「へ、変な…すっげー怪しい奴がいたんだよ！」

「不審者どころか…こ、この世の者とは思えませんでした！」

「…単行本第2巻で『非科学的な物は信じない』と言つてた円谷君がそう思つなんて…よっぽどね…」

「単行本？」

「…こつちの話よ」

ともかく、あの角を曲がつた先に、好奇心旺盛な子供さえも寄り付かない脅威が待ち構えている事は分かった。

「…じゃあ、私が行くから」

「え！？」

「何かあつたら連絡するから…あなた達はお菓子売り場でも見ておくといいわ」

「…気をつけて下さいね？」

『裏社会をくぐり抜けた元マッドサイエンティストをなめないで頂戴』…とは言えないので、微笑んで相槌を打つに留めた。

「なあ、灰原…」

珍しく真面目な顔で、哀を見つめる元太。

「何かしら？」

「…おやつは何円までだ？」

「別に制限しないけど…生活習慣病になりたくなければ、くれぐれも7歳児の栄養所要量の上限をよく考える事ね」

ぶつきらぼくに答え、野菜売り場へと足を向ける。

「あ、待てよ灰原！ まだ聞きたい事が…」

哀はそれに振り返る事なくぴしゃりと言った。

「バナナは、勝手におやつに入れればいいわ」

…さてと。

野菜売り場に差し掛かり、一つ深呼吸。

ゆつくりと、野菜を一つずつカートに入れながら進む。

カボチャ…人参…玉ねぎ…

…いた。

3 m先に、異様な空気を纏った輩がいる。

乱暴に縛られた、パサついた長い金髪。

シワだらけのTシャツ。

そんな取り合わせだから、ダメージジーンズは、お洒落ではなく本当に中古品ではないかと思われてくる。

そして、陳列棚に向かってぶつぶつ何か言っている。

確信を持って言える。危ない奴だ。…にしても、一体どの二トなんだ。

次の瞬間、ニート（仮）は癰癤を起こしたようにカートに入っていた野菜を全て棚の中へぶち込んだ。

野菜の種類をこちゃまぜにすると、いい年してマナーも知らないらしい。

「ちよつとあなた！」

勢い余って、哀は駆け寄り声をかけてしまった。

そいつが、ゆっくりと振り返る。

かろうじて、女である事が判明した。

まぶたは腫れぼったく、眼球が充血し目付きは悪い。真っ黒なクマ。

唇はプールに入りっぱなしだったかのように紫。

そしてファンデーションの乗りは最悪。スキンケアがなくてない。

哀は、ただ固まっていた。体が動かない間も、脳は必死でフル稼働を続ける。

―何やってるのよ私は。注意するか逃げるかどっちかにしないと…

―あれ？ この顔どこかで…

―誰だったかしら…

―いやまさか、こんな崩れた顔の人、私の周りにいるはずが…

―でも、ついこの間、言葉も交わした気がする…

やがて、女は血色の悪い唇をニヤリと歪め、哀を偉そうに見下ろ

して言った。

「奇遇ね、シエリー」

思わず『ぐえ?』とかいう変な声が出そうになった。

「ふふふ…私に出会った驚きで声も出ないのかしら?」

……

…え?

「…えええええっ!?! あ、あなたベルモット!?!」

「…今気付いたの?」

青ざめズザザと後ずさる哀を見て、『リアクションが遅いわ』と訝しげなニート女もといベルモット。

そう、全く気付かなかった。

彼女特有の妖艶な魔性の女王のオーラが今や、けだるい負のオーラに負けてすっかり陰をひそめていたのである。

哀は心底後悔した。こんな所で出会ってしまうなんて…っつか何でこんな所にいるんだよバカヤロー…と。自分はこのまま抹殺されるのだろうか。

恐怖を押し殺し、精一杯強がり言う。

「…こんな所で私を始末しようものなら、あなたはすぐに捕まるわよね?」

「その前に質問に答えて。彼は来てるの?」

「…は?」

「Cool guyはここにいるかって聞いているのよ」

…どいつもこいつも。

「…来てるわよ」

面倒臭がりながら、苦々しく嘔を吐き捨てる。

「あら、そう…彼に『シェリーを諦める』と言った手前、あなたに手は出せないわ。ラッキーだったわね…まあ、今日はそもそも銃を家に忘れてるんだけど」

なんじゃそりや。拍子抜けすると同時に、今度は今のベルモットの格好への疑問が激しく沸いてきた。

「…ねえ、何なのその格好は」

「変装に決まってるでしょ」

「…そう…よね…変装…よね」

要するに、『その姿が素ってわけじゃないわよね？』という確認だ。
「そうよ」

さすが女優、動じていない。そして、髪をかきあげようとした指先は、パサパサキシキシの髪に引っ掛かってびくともしない。…痛々しさを感じた。

「顔色も悪いわ」

そう言うってから、哀は気付いた。まぶたの赤がやけにヌルヌル、そして唇の紫がやけにチカチカした光沢を放っている事に。

…口紅とアイシャドーを逆に付けている。

「…二日酔いのせいかしらね」

と答えたベルモット。酒の名を冠した女もついに酒に吞まれたか…と哀は思った。そしてけだるい気分を引きずり、こんな自堕落な姿になってしまったのかと想像する。

「ゲームで負けてムシャクシャしてたから飲み過ぎたわ」

「…ゲーム…」

犯罪組織の一員の口からそんな単語が出た事に、哀は寒気を覚えた。
「そうよ。ウオッカと…2人じゃつまらないから無理矢理キャンテイとコルン、それからついでにキールも誘って。それにしてもスナイパー組ったら付き合いが悪すぎるわ。カルバドスだったら盛り上がったでしょうに」

哀はめまいを覚えながら、恐る恐る、禁断の質問を口にした。

「…ジンは？」

「ああ、誘ったんだけど『くだらねえ』って」

その返事に、なぜか安堵する自分がいた。

「ゲームって言っても、低俗な電子ゲームじゃなくってよ？ 高度な心理的駆け引きが必要なよ。自信があつたのに、私はあるところか最下位だったわ…」

「へー…そう…」

哀の唇は震えていた。

「そう…ポーカーフェイス自由自在の私が負けるなんて…ばば抜きで」

ばば抜き…

ババヌキ…

ババヌキ…

B A B A N U K I …

『いやああああ！！！』

哀は危うく、ホラー映画の主人公よろしく、頭を抱えてそう叫ぶところだった。

「どうして？ どうしてみんな普通の札ばかり取っていくのよ？ ああ、そして私の手元には最後までババが」

「も、もうやめて、その話は」

ガラガラと崩壊していく何かに耐え切れず哀はストップをかけた。
ただでさえ嫌な話を、サタン鬼塚（単行本57巻参照）のような
顔で感情を込めて語られてはおぞましさ倍増だ。

「ふん…まあいいわ」

話を強制終了させられたベルモットは、やや不満げながらも、カー
トを押し野菜売り場から立ち去ろうとする。

「つて、ちよつと！ 散らかした商品を戻しなさいよ！」

「知った事じゃないわ…それに、カレーを作る人が通るかかれば丁
度いいじゃない、材料が一カ所に集まってるんだもの」

けだるい口調、そして身勝手な論理のその返事に、哀は過剰な反応
を示した。

手早く野菜を元あった棚に戻し、駆け足でよれよれの後ろ姿を追
う。

「ちよつと…あ、あなたもカレーを作るつもりだったの？」

「あら、あなた”も”？ フ…つくづく奇遇ね」

紫の唇で微笑む女を見ながら、『こんな奇遇は願い下げだわ』と哀
は感じていた。『というか何で自分は彼女の話に付き合っているん
だ』とも。

「でもね、作るのにはバカバカしいから止めにしたわ。銀幕の女王が
家庭的に料理だなんて、相応しくないでしょ？」

「ええ…まあ、ね」

鳥肌の立つ腕をさすりながら哀は曖昧に応えた。

「—だから」

そう言つて、ベルモットはある棚の前で立ち止まった。

「こつちの方がいいと思つてね。」

ベルモットの手には、ボ○カレー。

「…!!」

絶句した哀の脳裏には、鮮明に、イメージ映像が渦巻いた。

―延々と、低く小さく唸る回転皿。

オレンジ色の光を顔に浴びながら、（何もする事がないので）佇むベルモット。

ちなみに格好はニート仕様。

やがて、その電化製品は調理完了を告げるのだ。

チ――ン…

『やめてええええ!!』

本日何度目かの、叫びたい衝動。

（気付いて、ベルモット！ あなたが『レンジでチン』したら手料理より格段にイタいつて…!）

哀は心の中で叫びながらもやはり自問していた。『どうして自分は組織のイメージ崩壊をこんなに恐れているのだろう』と。

それはきつと、元同僚の自分まで『お仲間』扱いされるのが嫌だからだろう。

「…もう、何が何だか分からなくなってきたわ…ベルモット…あなたって人は一体…」

哀が言い終わらない内に、女はすかさず人差し指を唇に当てた。

「A secret makes a woman woman . .
. Bye , Sherry !」

「あ、ちよっ…」

反論する隙も与えず、金髪の後ろ姿は遠ざかっていく。

一つため息をつき、哀はお菓子売り場へと向かった。元太達はやはりヤイバーのお菓子を熱心に見ている。

「ねえ元太君、どう？ その箱、何番のヤイバーが入ってるの？」

「この隙間からじゃ分かんねえ…」

身をよじり顔をラムネ菓子の箱に押し付ける元太。

「無茶ですよ、中身のおまけを買っ前に見るなんて！」

「…お待たせ」

「あ、灰原！」

元太の目の周りにはくつきりと四角い跡があった。

「大丈夫だった哀ちゃん？」

「怖い人じゃなかったですか？」

振り返った子供達は口々に問う。哀はほんの少し微笑んだ。

「危害を加えられるような事はなかったわよ。」

その時哀の携帯が鳴った。素早くポケットから取り出す。

「あら、5時丁度だわ…もう帰らなくちゃ」

「…はい！」

元氣よく返事をした歩美達と共に、レジへ向かう。

遠くに、ベルモットの小さい後ろ姿が見えた。

ふと、哀は彼女の座右の銘が納得できたような気がした。

『秘密で隠しておかないと軽くヤバイ』

言い方を変えれば、そういう事か。

「…あなた達は、あんな大人になっちゃダメよ。」

「え？」

丁度宝石売り場では、『田村』が金髪女を視界に捉え、かなり引いている所だった。

組織の幹部、魔性の女としてのベルモットにも、フェミニスト怪盗をも寄せ付けない負のオーラを放つベルモットにも、今後一切会いたくはないものだ―哀はそう思った。

少年探偵団は、カラスが舞う夕焼けの中を、買い物袋を手に提げて阿笠邸へと楽しげに歩く。

色々な事がありすぎてやや疲れた哀にとって、子供達の屈託のない笑顔は最高の癒しだった。

ちなみに、先ほど哀の携帯を鳴らしたのはアラームではなく、メールだった。

哀が今一度、携帯を開き、文面を確認する。

2008/XX/XX

17:00

From: 博士

件名: 哀君へ

早く帰ってきてくれ

腹減った

「…腹時計も、侮れないわね」

哀はそう呟くと、3人の後ろ姿を追って足を早めた。

彼女の頭の中では今、『メタボ博士を野菜オンリーのカレーでベジタリアンにしちゃうぞ作戦（仮）』が動き始めていた。

12コマ目：飽きない買い物、情けない女（後書き）

反省会 「介入」の次の回がまだ3分の1くらいしか書いてないの
でちょっと焦ってます…ここのところテスト続きで疲れました。

さて、今回は一度はやってみたい（？）組織ものに挑戦してみま
した…というか組織のイメージをぶち壊す事に挑戦しました。それ
に伴いこれまでの回より登場人物のテンションも全体的に壊れ気味
です（笑）

この話はわりと前から考えていたものみたいです。「みたい」と
いうのも、この原稿を久々に編集してみたら、博士のメールの日付
が2007年になってたんですよ（笑）1年ほど放置されてたもの
がやっと日の目を見ることになったということですね。お楽しみい
ただけたなら幸いです（^^）

次回で、この短編集の最終回とする予定です。もう1話分のペー
ジを使った長めの後書きと一緒に送りできればと思っています。
まだどっちも全然書きあがってないですが（笑）

他の連載ともどもよろしく願いますm（ー）（ー）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564b/>

他愛ない日常

2010年10月11日04時01分発行